

〔資料〕

焼佚餘録

(一)

——森哲四郎氏の生涯と良寛書蹟研究——

森 哲次郎・田熊 信之

〔解題〕

平成五年三月十五日、九十七歳の高齢で長逝された森哲四郎氏は、良寛の書蹟研究者として、またその書蹟鑑定者として、研究者間には周知された人物であり、その誠実、篤厚な人柄とともに抜群の記憶力の下に蓄積された該博な知識は、面晤する人々に崇敬の念を抱かせずにはおかなかった。しかし、哲四郎氏本人が、著述をあまり好まれず、書蹟、字迹の分析、研究に傾倒、専心することが常であったため、その行実を周囲の人々にその一部が知られるのみであった。

哲四郎氏の良寛の書蹟研究は、実作、原蹟を自らの眼で精査することを第一としていて、書蹟の所蔵先への長期間滞留やそこでの模写、撮影など

森哲四郎翁の平素



箱書き中の森哲四郎翁 平成4年



歓談中の森哲四郎翁と長氏 平成4年

の実施、また自ら各種各様の書蹟原品を研究の実資料とすべく、金銭を惜しまず購求、保存し、これを朝夕に披き見て、双鉤を採りつつ字形の分析をはかるなどのことを行い続けていたが、こうしたことを全身全霊で支えられたのはその夫人と三男五女の家族の方々であった。

筆者は、昭和三十年代末より良寛和尚の為人と詩歌作品に魅かれ越後通いを始め、国上山中の五合庵下の寶珠院のご住持板屋光範和尚・つる夫人の顧愛を得て実の子の如くして頂き、そこを自家同然にして時となく信宿し、良寛和尚ゆかりの地を巡りその地の方々の温かな心に触れさせてもらったことであった。この間、同山中の本覺院のご住持澁谷啓阿師にも親昵し、共に与板の森哲四郎氏宅に伺い、同師の開眼供養した本覺院伝来の良寛乾漆像を拝したこともあり、さらに恩師飯田利行博士のお供で森氏宅での歓談に陪席させて頂き、その後、森氏宅にしばしば伺い、哲四郎氏とともにご夫人節氏、次女貞氏、三女長氏ほか森家の方々に深い恩遇を頂き、お宅に長く宿泊させて頂いたことなどもあって、ご家族の方々の並々ならぬ良寛和尚への敬慕とその書蹟研究への情熱を直に知ったことであった。

哲四郎氏は、ご家族の支援と共に交流を深めた学者、芸術家、宗教家、医師、財界人、実業家の善意溢れる援助を得て、自らの願う良寛の書蹟研究の道を全うさせたことであるが、その業績を示す蔵品、書蹟、書作品の一部が、森家と濃やかな親交をしていた在地の教育者・与板町教育長石黒秀一夫妻を中心にした方々によって、哲四郎氏逝去後一年余に当たる平成六年九月二十六日から二週間に亘って、郷里与板の歴史民俗資料館で陳列、展観されるに至った。

この展示会は地方でのものとは言え、きわめて盛会で、遠く北越からバ



森哲四郎展風景 会場・入口

(平成6年9月26日～10月10日 於 新潟県三島郡与板町与板歴史民俗資料館)



森哲四郎展開催記事

(新潟日報 中越版 平成6年9月30日)



森家全焼記事 (平成24年1月29日出火、住宅及び土蔵全焼)
(朝日新聞 新潟版 平成24年1月30日)



森哲四郎展企画、実施尽力者・与板町教育長 石黒秀一夫妻

ス仕立てで来観する一団もあり、在地の新聞、テレビでも報道されている。森哲四郎氏の業績の一斑がこうして一地方を越えつつ周知され出したわけであったが、哲四郎氏逝去後十八年目にあたる平成二十四年一月二十九日未明、哲四郎氏の助手となっていた三女の長氏宅すなわち哲四郎氏の故宅で失火による火災が発生、母屋とともに後方に建造されていた土蔵が罹災し、きわめて貴重な原資料を含めた一切の資料が火中して烏有に帰してしまい、これを宮々と保存して来られた長氏もその妹陽子氏と共に痛ましくも亡くなられてしまった。

与板歴史民俗資料館に出陳した肉筆資料類と共に哲四郎氏が全家族の支援の下に身代を傾け尽くして蒐集した膨大な原資料、貴重な良寛の真筆原蹟や、江戸期の宗教思想、文化芸術、文学を研究する原資料、またこれに関わる近・現代の学術、文化、芸術人士の重要な遺品がほぼ全て焼亡してしまつたのである。

さて、こうして焼亡した膨大な遺品については、不幸中の幸いにも哲四郎氏の次男で郷土史研究家の哲次郎氏が控えるためにその主要資料の半ばをビデオ撮影していた。そこで、哲四郎氏の業績の実像を知り、また貴重な良寛研究原資料の実態を把握し、哲四郎氏が念じ続けておられたように、これを研究者間に提供する目的で、森哲次郎氏と共に、撮影映像の個々を抽出し、これに出来る限りの録文を添え、本誌に連載して掲出することとした。

今回本誌に掲出するものは、焼亡した哲四郎氏愛蔵の良寛ゆかりの遺品と卷子、巻軸、色紙等々各種各様の良寛書蹟研究に関わる人士の書画、および哲四郎氏自身の学書由来の書作である。なお、(一)以降には、確認可能な哲四郎氏愛蔵の良寛書蹟を順次掲出していく予定である。

ところで、森哲四郎氏の経歴、略伝については、先述の石黒秀一氏の数篇の労作

- 「良寛の書跡研究七十余年 森哲四郎」与板町教育委員会『与板の人びとと与板の人物誌』p104～106、平17・3
- 「良寛の書体研究 七十余年 森哲四郎の回想」―良寛「行灯自画像賛」全国良寛会『良寛』16号、p54～62、平成元・12

「追悼 森哲四郎先生 弔辞」全国良寛会『良寛』23号 p.58～59 平5・5

「良寛の書蹟研究七十余年 森哲四郎（九十七）翁の回想」——青山帖物語 全国良寛会『良寛』23号 p.60～69 平5・5

「良寛の書蹟研究家 森哲四郎翁の回想」——塩ノ入峠の良寛歌碑について」

全国良寛会『良寛』30号 p.60～69 平8・11

があるが、筆者がご家族、殊に長氏から伝聞していた事柄などを含め、ここでその概略を記述しておくこととしたい。なお、後掲する石黒氏の誌録した稿を補訂、加筆した哲次郎氏重編の「年譜」も参看して頂くこととする。

森哲四郎氏は、明治二十八年九月十三日に新潟県中蒲原郡鳥屋野村（現、新潟市）の富家櫻井家に唯三郎、ジュンの四男一女の四男として生まれ、明治三十五年一月、縁故があった新潟県三島郡与板町の村七呉服店森博資、ヤイの養子となった。養父は石油会社「寶田」の創設にも関わった実業家でもあり、村松藩に由縁をもっていた人物であった如くで、開業していた呉服店の屋号「村七」も村松屋七左衛門を略した呼称であったと伝わる。哲四郎氏は当時新潟から川蒸気船に乗って与板に至ったと言われる。

この後哲四郎氏は明治四十二年四月に県立新潟商業学校（現、新潟県立新潟商業高等学校）に入学し勉学するが、養父から「商人は字が下手だとお客さまに信用されないから手習いに励むように。」と言われ、また習字担当の教師の影響もつけ書道に関心をもつに至った。養父が本与板の石丸好古から借用してくれた巻菱湖書『小倉百人一首』の臨書に励み、さらに艸書の習得にも心を尽したのはこの頃である。

大正三年に上記商業学校を卒業した後、家業の呉服商に従事するが、養父が愛好する書画にも興味をもち、家蔵されていた良寛書に関心を深めた。大正五年新町の長谷川石松が持参して養父に披見させた良寛の肉筆書軸（鬮體画賛）を一晩借用して臨書、これを契機に良寛書への傾倒がはじまった。大正十一年養父の死去により呉服店の店主となり、店舗での呉服販売と共に自転車での近隣の富家への行商も行い、傍ら謡いを嗜みまた和漢の法帖を手習いし、良寛の遺墨集を懐にして時となく良寛書の魅力を追究した。出先の旧家で良寛の遺墨に出会うと、商売そっこのけで遺墨を借覧、撮影

も行い、双鉤等も試み、資料蒐集とその蓄積に没頭した。家人はその情熱に押され挙げてこの研究に協力するようになった。

昭和二年健康を害し家業を家人に委ね、自らは療治と共に良寛書の研究に励んだ。昭和五年には森家の菩提寺長明寺の住職で学者の前波善學氏の紹介により糸魚川に相馬御風氏を訪ね面晤、そして御風氏から良寛研究の先学で日本画家の安田靫彦画伯を紹介され、以後永く神奈川県大磯町在住の安田画伯に師事するに及んだ。

その後昭和八年、粟生津の鈴木家宗家に四日間通い続けて所蔵の良寛書の卷子の披見を許され、これを鉛筆で臨書し、ご当主の鈴木宗久氏の求めでこの卷子に冒頭の詩句を採って「青山帖」と名付け、この後宗久氏の信認を得てこれを覆刻するに至った。この間の事情は、哲四郎氏の口述にもとづく石黒秀一氏の「青山帖物語」の文に詳細が綴られているので一閱を願いたい。

この年以降、「豆本」「九相圖帖」の研究に打ち込み有願の庇護者であった新飯田（現、白根市）の千野家で長期逗留し有願、千野氏の書蹟の研究を進めた。昭和十年には津田青楓画伯が来訪、良寛書を談論し交流を深めた。その後画伯は来泊しては書画を即写しこれを哲四郎氏に遺っている。昭和十三年、与板光西寺住職藤井界雄師と義兄弟の高野辰之博士が来泊、「豆本」について激論を戦わし、分水町牧ヶ花の解良家に同道、良寛の遺墨を実見、博士は哲四郎氏の精密な研究に感動し、自らの信州野沢温泉の別荘での研究を勧めたがこれを固辞し、郷里での研究を続けた。

そうして昭和十四年に至り、長年師事していた相馬御風氏より、以後は自ら良寛書の鑑定をするよう勧められ、同氏愛蔵の端溪硯を贈与された。昭和十六年には歌人吉野秀雄氏が来泊、以後親交を深めたが、この翌年の昭和十七年に、御風氏とともに良寛研究の先達として敬慕、師事していた安田靫彦画伯から、「もう安田に頼ることはない。自分の眼で良寛の書を見るように。」と自立を促された。

この後、昭和二十五年には新潟県中蒲原郡横越村大字沢海の北方文化博物館館長の伊藤文吉氏の懇請を受けて、同館で企画した會津八一博士を顧問とした良寛没後百二十年記念展の開催に尽力した。この折、復員して同

館学芸員となっていた東京帝國大學国史学科出の若手の宮榮二氏との写真借用に關してのあらぬ出来事や、先輩原田勘平氏とともに閲覽した伊藤文吉氏提示の『百人一首』の審定に關わる事情については、後年哲四郎氏が口述し石黒氏が筆録、孔版印刷した資料が筆者の手元にあるので、これを本文末に附録することとした。それによれば、哲四郎氏が傲岸な者の間に如何に苦汁を嘗め犠牲を払いながら、独力でそのひたすらな研究を拓き来たかが知れることである。内外を問わず研究者を自称する人々は、権威誇示と自己業績の累積を先とすることが多く、哲四郎氏はこうした中で謂われなく受ける侮蔑を払い除けながら、しかし善意溢れる高士の温かな援けをも得つつ自己の願う道を一途に歩んで来られたわけである。

財界人であり実業家でもあり米国への長い留学経験もあつた伊藤文吉氏は、哲四郎氏の熱意と人柄を愛しみ、北方文化博物館に永住し研究をするよう勧めたが、哲四郎氏はこれを辞退、故地与板での研究生活を続けた。この年に与板町の有志と共に塩之入峠に良寛歌碑を建立した。この歌碑は、翌年良寛遺墨の鑑賞に来訪した吉川英治、杉本健吉両氏が観覽し、その刻書の美を絶賛した。

こうした中、この千涯画伯が来訪し、以後頻繁に哲四郎氏宅に現れ月の半ばを過して画業に専念、哲四郎氏に賛書させるといった合作も多数制作した。昭和二十九年健康を損ね病臥、家計の故あつて蒐蔵の良寛書の大半を縁戚に譲渡、しかし後にそれらの全てを回収し研究の資を確保している。昭和三十三年には、良寛書『般若心經』の覆印に關わつた奈良法輪寺貫主井上慶覺師が来町、哲四郎氏と歓談の後、奈良への転住研究支援を申し出る。法隆寺寺主と共に支援したいとのことであつたが哲四郎氏はこれを辞退した。

この後、昭和三十五年には東京都港区南青山の根津美術館での良寛展への協力依頼を受けて上京、のち館主の根津嘉一郎氏の招きで長氏を帯同し同館内で四年四か月滞在、東京方面の良寛遺墨の研究に専心した。この間、書家で中国金石学者の西川寧氏に書法の指導を受け、哲学者で教育者の安倍能成氏、国学者林甕雄の孫の洋画家林武氏ほかの諸家と交流した。昭和四十年哲四郎氏が帰郷するに際し、武氏は自らの持つ鎌倉の別荘又は東京

のマンションでの研究を勧めたが哲四郎氏はこれも謝辞、故地に帰戻した。その後健康不良となり、長岡中央綜合病院で入院暮しをし、この折、地元長岡の大光相互銀行頭取の駒形十吉氏より物心両面の多大な援助を受けつつ、良寛書の研究を続け、昭和五十一年、中国音韻学者で禅文学の大家飯田利行博士と共著で『傳良寛和韻大智偈頌』を刊行した。

昭和五十六年には『良寛書百人一首』の複製発行を企画しこれを遂行していたが、諸事情によりこれを断念した。筆者が仄聞したところによると、諸事情とは、哲四郎氏の願ひ、純粹に良寛書の研究に資する稀有で未出の『良寛書百人一首』を複製刊行し研究者間に提供しようとしていたにもかかわらず、朝日新聞記者が世評を煽る記事を書き、刊行協力を依頼された者等が編集の方向を曲げかねぬ状況が出来させたことであつた、という。不幸なことにこの貴重この上ない『良寛書百人一首』の原本は、平成二十四年一月の不慮の火災により焼亡したと見られ、現在その焼残の片紙も遺されてはいないが、僥倖なことに曾て複製公刊の協力者となつていた新潟大学名誉教授加藤儂一氏の手元に刊行予定の求龍堂で撮影した一連の写真が保存されていて、これをもって同氏監修の名のもとに、本年平成二十八年六月新潟日報事業社から全影の写真集が公刊され、辛うじて哲四郎氏がその価値を確認した原影が世に知られることとなつた。この公刊書には、監修者加藤氏の「三十年の空白をこえて」と題した序文と、同氏の新潟大学教育学部の紀要（第24巻第1号）に掲出した論考「良寛百人一首」とが載せられているが、この原書を提示した伊藤氏に対し原田勘平氏が「よく偽書説を説く中、森哲四郎氏をはじめ良寛書と認めていたことや、後日伊藤氏が密かに良寛書の研究のために哲四郎氏にこれを無償で贈与した状況がきわめて蒙昧に綴られており、如何にも監修者の功が先出されている印象がもたらされるところがある。本来、此の書は、小字の副題ではあつても、「森哲四郎発見、所蔵」とでも冠すべきものであるように思うのは筆者だけであろうか。森哲四郎氏が昭和五十年代半ばに口述していた覆刊予定書への序跋を後年石黒秀一氏が筆耕して孔版印刷した後掲の「良寛百人一首の話」の一文をこの新刊書と共に併せ読む必要があるようである。

『良寛筆 百人一首』記事



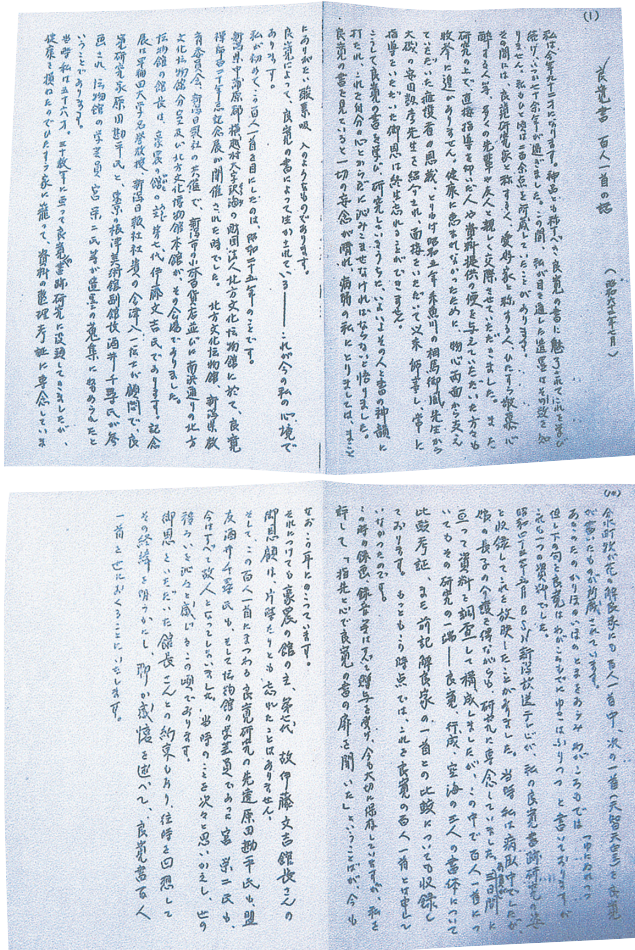
加藤信一「話題追跡」記事
「良寛筆百人一首」を調査して
(書道美術新聞 第69号 昭和56年2月1日)



徳田秀一「良寛の百人一首」
(『藝術新潮』 昭和56年2月1日)



浜田亮平「あった！ 良寛さん直筆の百人一首」
(朝日新聞 全国版 昭和56年1月7日)



森哲四郎口述、石黒秀一筆録・印刷「良寛書 百人一首の話」(昭和62年7月)

(田熊 信之)

〔掲出図版、録文〕

〔凡 例〕

- 一 本稿での所掲図版は、森哲四郎氏が所蔵していた良寛書蹟研究関連資料の写真の一部である。
- 二 所掲図版は、森哲次郎がビデオ録画していたものから抽出して印刷したものである。
- 三 所掲図版は、森哲次郎と田熊信之が内容を勘案して部類別に配列したものである。
- 四 所掲図版のものは、不慮の火災によりほぼ全て焼亡しているため、必要があれば、映像不鮮明で色調不良のものでも掲出することとした。
- 五 所掲図版に関する録文については、紙面の関係で当該図版下には表記せず、別頁で一括して表示することとした。なお、原文の長大なものはその一部を表記するに留めた。
- 六 所掲図版に関する録文は、森哲次郎と田熊信之が共同でこれを行った。
- 七 本稿及び所掲図版の録文等は、人名への付称、敬称等を出来る限り省くこととした。

*本稿執筆、作図、編集等にあたり、元新潟県三島郡与板町教育長石黒秀一氏の文稿に多大な学恩を頂き、森哲四郎翁のご遺族及び関係の方々、殊に長岡市在住の森ヨリ氏ほかに温かなご支援を賜った。文末ながら記して心からの感謝を申し上げます。

参考資料

良寛書 百人一首の話 (昭和六十二年七月)

森 哲四郎

※文中の太「」は原印刷物の改ページを示す。

「私は今年九十二才になります。神品とも称すべき良寛の書に魅了されてこれを学び続け、いつか七十余年が過ぎました。この間、私が目を通した遺墨はその数を知りません。私もひと頃は二百余点を所蔵していたことがあります。その間には、良寛研究家と称する人、愛好家と称する人、ひたすら敬慕心酔する人等、多くの先輩や友人と親しく交際させていただきました。また研究の上で、直接指導を仰いだ人や資料提供の便を与えていただいた方々も枚挙に遑がありません。健康に恵まれなかったために、物心両面から支えていただいた擁護者の恩義、とりわけ昭和五年糸魚川の相馬御風先生から大磯の安田鞞彦先生を紹介され、面接をいっただいて以来師事し、常に指導をいただいた御恩は終生忘れることができません。こうして良寛の書を選び、研究しているうちに、いよいよその人と書の神韻に打たれ、これを自分の心とからだに沁みこませなければならぬと悟りました。良寛の書を見ていると一切の妄念が晴れ、病弱の私にとりましては、まことにありがたい酸素吸入のようなものであります。良寛によって、良寛の書によって生かされている——これが今の私の心境であります。私が初めてこの百人一首を目にしたのは、昭和二十五年のことです。新潟県中蒲原郡横越村大字沢海の財団法人北方文化博物館に於て、良寛禪師百二十年忌記念展が開催された時でした。北方文化博物館、新潟県教育委員会、新潟日報社の共催で、新潟市の小林百貨店並びに南浜通りの北方文化博物館分室及び北方文化博物館本館が、その会場でありました。博物館の館長は、豪農の館の主第七代伊藤文吉氏であります。記念展は早稲田大学名誉教授、新潟日報社社長の会津八一博士が顧問で、良寛研究家原田勘平氏と、東京の根津美術館副館長酒井千尋氏が参画され、博物館の学芸員宮栄二氏等が遺墨の蒐集に努められたというのであります。当時私は五十六才。三十三数年に亘って良寛の書跡研究に没頭してきましたが、健康を損ねたのでひたすら家に籠って、資料の整理考証に専念してしま「した。そんなある日、伊藤館長さんが原田氏を帯同して与板へお出でになりました。「日本一権威のある良寛の遺墨展にしてみたいから、あなたからも是非博物館に来て

手伝いをしてもらいたい」とこのことであります。私は、この状態でも健康が許さないからお断りをしたところ「森さん、あなたは身も心も良寛に打ち込んでいる人と聞いています。身体が弱いということもよく知っています。だから博物館の客分としてこの機会にゆっくり静養しながら勉強してください。蒲団なども一切こちらで用意するし、親戚に医者もいます。あなたの健康は、私が責任をもちます」と重ねて懇請されるのでした。私は思わず「そんなことができるはずありません」と言ったところ、すかさず原田氏が「森さん、館長さんは慶応大学を出てアメリカへ八年間も留学されたお方です。立派な良識のあるお方ですし、あなたの事情も十分に御存知の上でこうおっしゃっているのです。お任せしておいでになったらどうですか」ととりなして下さいました。館長さんは私の生まれが、横越村に近い鳥屋野村（現、新潟市）であることやその桜井家の状況についても十分御存知のようでした。また館長さんには、私とかねてから昵懇であった根津美術館の酒井氏が話をして、推挙してくれたようでした。私は館長さんの御好意に感激して気をとりなおし、博物館へ行くってお手伝いをさせて頂いたことにしました。これはあとで聞いたことですが、私が招かれたのは、出品予定の数点について酒井氏と原田氏の間で意見の相異なるものがあるので、それについて私に判断を求めるためのものでした。遺墨展は五月三十一日から六月四日まで新潟市、六月六日から会場を移して二十五日まで北方文化博物館で催されました。私ははじめ三日間ほど新潟市に滞在していたが、館長さんから使いがきた「ので急遽沢海の博物館へ出向きました。

参観者も多くたいへんな人気をよんでいたようでした。到着すると館長さんがわざわざ出迎えて下さって、部屋に通され、挨拶もそこそこに「森さん、すぐに休みなさい」と自分で蒲団を敷き始められたのです。これを見て原田氏が「旦那さま、何をなさるんですか」と言う、「いや、森さんは疲れているから休ませねばならないのだ」とおっしゃるのです。就寝前には私を便所に案内して、蓋をとってみせたり手洗水の出し方にまで気をくばって下さるのです。風呂場へもつれていって「原田さん、よくめんどろをみてやって下さい」と至れり尽せりの心づかいに、私は思わず頭が下がるのでした。ここでは四畳半の部屋で原田氏と起居を共にすることになっていました。博物館へ来て三日目のことでした。この日は割りに参観人も少なく会場は静かでした。私はノートを持ち、万年筆には布を巻

いて心くばりをしながら一点ずつ時間をかけてその特徴を記録していました。その時、会場の端から掛け物を並べ替えてきた若い係員が、私の姿を見るや「森さん、何をしているんです。ペンですか、筆ですか。やめて下さい」と大声で駆け寄ってきたのです。私は「はい、この通りです」と手にしたものやノートも見せました。彼は不機嫌そうな顔をしながら戻ったのです。私は突然のことであり、ずいぶん失礼なことを言うものだと思いましたが、あとで聞くとこの初対面の人は、博物館の学芸員宮榮二氏ということでした。せっかくの機会を与えていただいたので、ゆっくりと調べるつもりでしたが、こんなことではあともうまうまいきそうもないと考えました。そんな思いでいる時、原田氏が「この遺墨の中から百点を選んで写真にする計画があるから、あなたも宮君に話をして原価で頒けてもらったらどうか」と話してくださいました。「せっかくの御好意ですから、その旨を宮君に話し焼き増しを願ったところ「今までの遺墨集はみんなまちがいが多いのです。——安田さんが監修された遺墨集もそうです。大体安田さんは好事家でしかないのです。——」と、そんな話を立て続けにしてから「今度はほんとうのものを作ります。東京の博物館の三人が主となってこの会場の中から百点を選定して、権威のあるものを作ります」と自信たっぷりの話でした。私が長年安田鞞彦先生に師事していることを知っていて故意に言うのか、若さの故か、感情むき出しのことはが続くのでした。その上に私の願いについては「素人のあなたには、フィルムを貸すことはできません」ということです。私はフィルムを貸してほしいなど一言も申しません。それにしても安田先生を好事家ではないということばは、私の胸にはたまらなく痛かったです。極めて不愉快でした。売りことばに買いことばということでしょうか、私も「わかりました。写真はいただかなくとも結構です。ここで研究させていただけるとは、まことにありがたいと思っていたのですが、致し方ありません。この会場に出品してある遺墨の所蔵者はみんなわかりますから、このあと一年半くらいで私はすべて見ることができます。写真はいりません」。そして「私が出展したものは写真にとらないで下さい」と申入れておきました。こうして私の心は決まり、その夜館長さんを訪ねて「せっかくの御好意をいただきましたが、与板から急用の電話がありました。私の役目も済んだようですから明朝すぐ帰らせていただきとうございます」と申しあげると「そうか、急用であればいたし方がない。——一週間位でまた来てくれる

した。そして「ゆうべはあまりにも熱心なのに驚いたが、君、あれが欲しいのですか」とおっしゃるのです。私が求めたいと思われたらしいのです。当時の金で二、三百万円はするだろうと思いましたが「とんでもありません。そんなだいたいされたことは考えもありません。昨晩もお願いしましたが、大塚巧芸社で原寸法の写真をとらせていただきたいのです。そして朝晩眺めて心を清め、更に勇気を得て勉強を続けたい。ただそれだけでございます」と申し上げました。館長さんは「よくわかりました」とうなづいておいででした。私は与板へ帰る前に、新潟市の古物商川島氏を訪ねました。

良寛を「通じての知友あり、北方文化博物館へ案内してくれた人です。辞去するに至ったいきさつを話すと「あなたに宮君のことを話さなかったのは、私が迂闊でした。せっかく与板から出てきたことであり、私がよく話をするからもう一度もどってみないか」とすすめてくれたが、もう引き返す気がしませんでした。ところで博物館で計画した遺墨の写真は、巧芸社の田中菊三氏をはじめ、関係者の御厚意で、私もそれを手にすることができたからおもしろいものです。昭和二十五年。この年は七月から八月にかけて天候が極めて不順で、そのために出展した遺墨の返却も遅延していたようです。やがて館長さんから遺墨返品の際に、約束した百人一首を持参するという手紙を頂戴しました。九月一日、第四銀行の倉品義治氏（与板支店長）が希望されたので、歓待のために同席をねがって心待ちにしていました。各地の所蔵者へ返品を終えてようやく午後四時頃、原田勘平氏と共に到着されました。早速二階の部屋へ通したが、遺墨展の話がいつまでも続いて、百人一首の話はいつになっても出ません。私は階下へきて料理作りに忙しい妻に「例の話はいつこうに出ない。だめなのかな。心配でたまらない」と不満をこぼしながら二階へ上ると、私の顔を見て気がつかれたようすで、鞆の中から新聞紙の包みをそと取り出し、小脇にかくすようにして階下へ行かれました。何かみやげでも家内に渡されるのかと思っていると、妻が呼びました。館長さんは茶の間に坐ってお待ちになっていました。包みをとり出しながら、二階を指さし、口を指をあてて「約束のものを持ってきました。これはあなたの研究資料としておあげします」とおっしゃるのです。私は思わず「とんでもないことです。とてもいただくわけにはまいりません。半月ほどお貸し下さるだけでありがたいのです」と辞退すると「私は、君が持っていることが良寛さまにとって一番いいことだと

思うから今日持ってきたのです。——不用ならお貸せ（かか）することにしよう」

「旦那さま、まことに失礼しました。お許し下さい。どうか前言を取り消させて下さい。謹んで頂かせてもらいます」。思いもよらないおことば、そして温かいお気持ちに胸が迫り、しどろもどろになってお願いやらお礼をくりかえしたのです。

そして「このお礼は朝夕研鑽を積み、将来必ずこの百人一首を天下に発表させていただきます」と申し上げたことでした。館長さんはまた口を指をあてながら「みんなに黙っているように」と言いのこして二階へいかれました。私は妻と顔を見合わせながら、階段を上る館長さんの足音を聞いていました。しばらくは言葉が出なかったのです。おかえりの時、お礼の心をこめて山田杜皐（与板の豪商、良寛と親交、俳人）に宛てた良寛の書簡「暖氣之節」の捲りを差し上げました。百人一首を手にしたことは館長さんとの約束ですから、誰にも話したことはありません。歌人で良寛を敬愛した吉野秀雄氏もよく来泊されたが、これを話したことはありません。箱書きをしていた安田鞞彦先生にお見せしたのも後年のことでした。ただ館長さんに引き合わせてくれた酒井千尋氏には、いきさつもあり友誼上、この日のうちに手紙で報告をしました。「私だけが得をさせてもらったようで恐縮です。あなたにだけは、お伝えします。館長さんとの約束ですから内密にねがいたい」と。酒井氏から折りかえし電話があつて「あなたがもらった百人一首は、もと刈羽郡西山町石地の素封家内藤久寛さんが所蔵されていたもので、聞くところによると内藤家の十八才位の娘さんのために、良寛が書いて与えたといわれているものです。会津八一さんが、恩師坪内逍遙先生の熱海の別荘、雙柿舎額面の揮毫を依頼された際、良寛の書から集字をしようとして、柿の字をさがして内藤久寛さんにねがったというエピソードのあるものです」と知らせてくれました。酒井氏が話してくれたエピソードというのは、次のようなことです。」

「良寛遺墨から「雙柿舎」の三字を拾い集めたいということであったが、雙と舎の字はあつたが、柿の墨跡が見つからなかったということです。この間の消息について、会津八一全集第七巻隨筆中に次のことがあります。

隨筆「雙柿舎の額」より

「——内藤久寛氏のところに良寛上人の百人一首があると聞いたのは、其の後間も無いことである。柿本人麻呂の柿の字がなければならぬ。それで市島春城翁を介して内藤さんに願つたところが、内藤さんは自分で手づから雙鉤にとつて示され

た。これで一ト先づ良寛の手に成れる雙柿舎の三字が揃ったわけだ。しかし集字の常として此の三字が何うしてもうまく釣合はない。そんな事でたう／＼良寛はやめにして、いつそ私が筆を揮ふといふことになつて仕舞つた。——」なお大正九年四月二十五日、七月三十一日付の逍遙宛書簡にもこのことについて述べてありますので、大正九年頃には良寛の百人一首が内藤家に所蔵されていたことはまちがいありません。」

「良寛がよく内藤家を訪ねていたことを証する資料があります。財界人、政治家として活躍し、引退後は藤原工業大学を開いた藤原鍊次郎氏の熱海別荘新築祝いに、内藤久寛氏が良寛の書を贈った書簡（昭和二年四月六日付）があります。

春暖之候益々御清穆奉拜賀候 然ハ熱海御別荘新成之御祝

迄ニ良寛和歌小軸入貴見申候 是ハ上人常時郷里石地宅ニ

来り認められたる由にありしものに候（略）

この小軸和歌は次のものであります。

この園の柳のもとにまどゐして遊ぶ春日は暮れずともよし

また私も今まで内藤家旧蔵の屏風をはじめ、多くの良寛遺墨を拝見していますが、すべて逸品揃えで、特にその六尺六曲屏風には次のように鑑定した記憶があります。

「右ハ良寛上人の眞跡也 良寛は勿論 古来草書中孤峯絶妙

絶妙の姿なり」と。

ただこの百人一首が、沢海の伊藤家に移った事情については、定かではありません。後に娘の長子をして杉並区高井戸にお住いの久寛氏の息、久一郎氏（平成元年十月二十日死去）を訪問、直接おあいして確かめさせたが、久一郎氏はそのような記憶はないとのであります。

一年半の後のことです。館長さんは、良寛画家こしの千涯氏を通じて「楽しく見せてもらいました。これはあなたのだいいじな研究資料ですから」ということばを添えられて、先におあげした杜臯宛良寛の書簡を返してよこされました。

伊藤館長さんは、このような高潔なお方でした。

以上が良寛書百人一首を、私が手にした経緯であります。

さて話は変わるが、昭和二十七年のことです。新潟市の萬松堂書店の二階で、有名

画家展が開かれた時、千涯氏も出かけたところ会場のテーブルを前にして腰かけておいでの伊藤館長さんが見つけて」

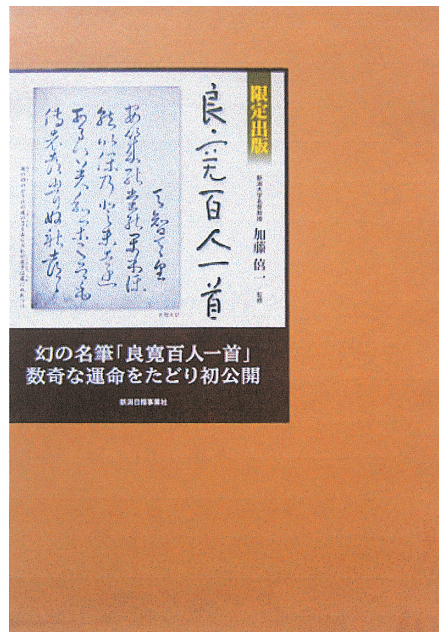
「千涯さん、ここへかけなさい。相変らず良寛ですか」「はい、精進しています。

与板の森さんのところで良寛の書を見ながらかいています。その頃、千涯氏は訪ねてくると、半月位は家族同様に寝起きして絵をかいていたのです。「それは結構です。ところで森君の健康は」「はい、それが寒くなると身がちぢむ思いがすると言っています。冬うちだけでも暖かな国へ行きたいなどと申しています」「そうか。よしわかった。家族と相談してみよう。江ノ島でもいいが、ひと先ず私のところ

へ来ないかと伝えてくれ。二階の畳部屋がいい。只飯だけは下へ来て食べてもらう。蒲団も貸せるし、医者の方も一切引き受ける。よかったら私のところへ来て研究を続けるように話してくれ。こうして館長さんの使いとして千涯氏が来てくれました。私はとてもそのようなことは許されるものではないと辞退したが、再度千涯氏が館長さんの招請を伝えにきてくれました。館長さんの度重なる御恩情に、私は感謝の気持ちでいっぱいでした。早速このことを家族に伝え、理想的な環境の中で良寛の書跡研究ができることよろこびをこめた家族一同の感謝状を携えていくつもりでした。またその頃は、良寛の遺墨を相当数所持していたので、その適切な措置も講じなければなりません。私は二男哲次郎を帯同して沢海を訪ねました。たまたま館長さんは所用のため上京中で、副館長の伊藤越夫氏にお会いして事情を話しましたが「私は兄から何も聞いていない。第一そのような費用もないはず。何れ兄が帰ったら伝えておきます」と、まことに素気ない返事でした。やむなく雑談のあと、話が良寛や良寛研究家などのことに及ぶと、こんどは副館長さんの方から次々と問いかけてありました。安田毅彦先生に師事していること、相馬御風、佐藤耐雪、津田青楓、吉野秀雄、吉川英治、原田勘平各先生方のこと、また私が「今まで三十数年の研究など問われるままに逐一お話をしました。副館長さんもすこぶる興を覚えられたようでした。やがて中食、暫時午睡のあとでした。副館長さんは前とうって変わって「先ほどの話を聞いたら、私の方があなたをここに招きたくなくなった。私が承知いたします」とおっしゃるのです。おねがいをして邸内をくまなく見せてもらったが、空いている土蔵がいくつもあります。これなら遺墨の保管もうまくいくし、ひそかに期するものがありました。ところがその頃のわが家の内情は、到底私のねがいを許さなかったの

です。事実私は家業は勿論、親戚知友の冠婚葬祭すらもすべて家族まかせで、ひたすら良寛書跡に没頭していたため、深刻な経済問題に当面していることを知りませんでした。それどころか、その整理のためには良寛の遺墨もほとんど手離さなければならぬ状態に陥っていたのです。それでも将来のことも考えて、この好機を逃してはならないと何回もすすめてみました。いつも身を粉にして私を支えてくれ、従順で最もよき理解者であったはずの妻も、この時だけはかたくなに反対して、館長さんへの感謝状はとうとう書かなかったのです。私はついに北方文化博物館に行くことを断念しました。ところで私がこうして良寛の百人一首に接してから幾星霜。日夜これを座右にして考証の結果、あらためて確信を得ることができ、恩師安田鞞彦先生からもこれを良寛真筆として箱書をいただきました。」「分水町牧が花の解良家にも、百人一首中、次の一首（天智天皇）を良寛が書いたものが所蔵されています。

あきのたのかりほのいほのとまをあらみわがころもではつゆにぬれつつ
但し下の句を良寛はわがころもでゆきはふりつつと書いておりますがこれも一つの資料でした。昭和四十三年五月BSN新潟放送テレビが、私の良寛書跡研究の姿を収録してこれを放送したことがありました。当時私は病臥中でしたが、娘の長子の介護を得ながらも、研究に専念していました。局員が三日間に亘って資料を調査して構成しましたが、この中で百人一首についてもその研究の一端——良寛、行成、空海の三人の書体について比較考証、また前記解良家の一首との比較についても収録しております。もっともこの時点では、これを良寛の百人一首とは申ししていなかったのです。この時の録画、録音等はすべて贈与を受け、今も大切に保存していますが、私を評して「指先と心で良寛の書の扉を開いた」ということばが、今もなおこの耳にのこっています。それにつけても豪農の館の主、第七代故伊藤文吉館長さんの御恩顧は、片時たりとも忘れたことはありません。そして、この百人一首にまつわる良寛研究の先達原田勘平氏も、盟友酒井千尋氏も、そして博物館の学芸員であった宮栄二氏も、今はすべて故人となってしまうました。当時のことを次々と思い返し、世の移ろいを沁々と感じるこの頃であります。ご恩をいただいた館長さんとの約束もあり、往時を回想してその経緯を明らかにし、聊か感懐を述べて、良寛書百人一首を世におくることにいたします。」



刊行された『良寛百人一首』 外箱表
(加藤傳一監修『良寛百人一首』
新潟日報事業社 2016年6月29日)

2016年(平成28年)8月21日(日曜日) 読書 26

加藤 傳一監修 良寛百人一首

原本が災で消えてしまった良寛書跡。その真実を明らかにする良寛書跡研究の最新作。良寛の遺墨の真実を明らかにする良寛書跡研究の最新作。良寛の遺墨の真実を明らかにする良寛書跡研究の最新作。

にいがたの一冊

原本焼失 貴重な遺墨甦る

代々の風流家、百人の名作を秘蔵する良寛の書跡。平安時代の書家・小野篁の真蹟が、道真の書跡「秘教帖」を真蹟として学んだ。良寛の書跡研究の最新作。良寛の遺墨の真実を明らかにする良寛書跡研究の最新作。

柳本 雄司

柳本雄司 「にいがたの一冊」記事
(『新潟日報』 2016年8月21日 26頁)

森哲四郎 略年譜

〔年 譜〕

はじめに

「俺は大成功したんだ。これ以上いうことはない。欲はかかん。」と言い、自らの我儘を許し、協力、支援を惜しまなかった家人と、良好な環境を整えて下さった数多くの知友への謝念を示しながら、歳九十七で逝った父森哲四郎は、虚弱な軀ながら、もともとこのような一生を送る道筋を授けられていたように思われる。「我以一貫之」といったその一筋の生涯は、一面固陋なところもあり自己満足に傾くところもあったが、情誼に篤く極度に欺瞞を嫌った澹清なものであった。こうした結果、自らの願うところは、不思議にも見る人、交流をもつ人に理解され、幾多の困難があっても、願うままに成就されることが常であった。研究の対象とした良寛の肉筆原書蹟もその関連資料も、思うままに自家のものとすることが出来ていた。明確な記録を欠いているが、自家の土蔵中には、恐らく総数数百を超えるものが保管されていたと見られる。その各々は、父の助手としてその身辺に在った姉の長が写真映像を含めて丹念な記録を留めていたが、それらもすべて火中して今に残されるものがない。曾ての主要藏品と共に父の一途な歩みの跡かたを垣間見ることができるのは、筆者が父のもとで、その主要な藏品を父と姉の言い付けのままに、細々と撮影していたビデオ映像ほかである。本稿は、こうした映像を研究者間の共有の資料とすべく逐次抽出して提示することを目的としているが、森哲四郎の生涯を一瞥して頂くため、その略年譜を下掲することとした。なお、この年譜は、父と親交を累ねていた石黒秀一氏が取り纏めたものをもとに、不足するところを付加、補訂し新たなものとしたものである。

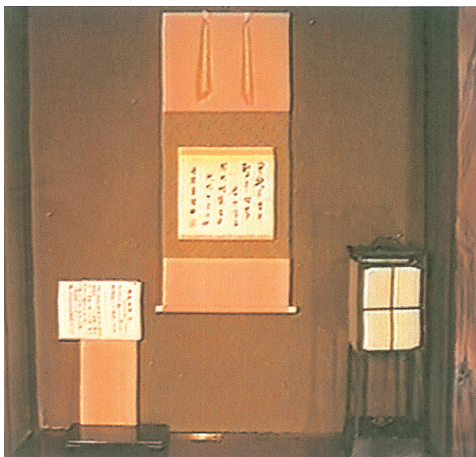
(森 哲次郎)

年	年齢	研究事歴
明治二八	1	九月一三日、中蒲原郡鳥屋野村(現、新潟市)に櫻井唯三郎、ジュンの四男として生まれる。
三五	7	一月八日、川蒸気船で新潟から移り三島郡与板町村七呉服店森博資、ヤイの養子となる。
四二	14	県立新潟商業学校入学、書道に関心をもつ。
大正三	19	同校卒業、養家の呉服商に従事する。養家には諸名家の書画及び数点の良寛の書が所蔵されていた。
五	21	町の愛好家持参の良寛書に惹かれ、一晚借用して臨書する。これが良寛書との初対面であった。
一一	27	養父死去、村七呉服店主となる。かたわら和漢の法帖を習う。良寛遺墨集はすべて二冊求め、一冊は解体して懐中にして商いの途次、研究する。良寛遺墨にあうと借用、写真撮影、双鉤等を行い資料蒐集に没頭する。やがて一家妻子を挙げて協力するようになる。この頃から塩之入峠頂上に良寛歌碑建立を念願する。
昭和二	32	健康を害し家業を家人に委ね、療治と良寛書の研究に没頭する。
五	35	菩提寺長明寺住職で篤学者の前波善學師の紹介によりはじめて糸魚川に相馬御風氏を訪ねる。御風氏より良寛研究家安田鞆彦画伯を紹介され、以後安田画伯に師事する。
八	38	詩稿「豆本」(二八九篇)を良寛の真筆と認めその研究に打ち込む。栗生津(現、吉田町)の鈴木家へ四日間通い同家所蔵の良寛書巻を臨書する。鈴木家当主の求めでこれを「青山帖」と名づける。
九	39	「九相圖帖」にめぐりあう。これを僧有願の書とする説もあるが、良寛の真筆と認め一連の研究に没頭する。分水町

- 一〇 40 の原田勘平氏を訪ね、同家所蔵の有願書「十牛図」額を長期借覧し、比較研究をする。また一年がかりで和島村の木村家、大矢家の良寛遺墨すべてを調査し写真におさめる。僧有願の擁護者であった新飯田（現、白根市）の千野家で一ヶ月間滞留し、有願の筆跡研究の結果「九相図」を良寛の書と確認する。昭和五年よりこの年まで、分水町解良家へ通い続け同家所蔵の良寛遺墨すべてを調査、写真にとる。この年津田青楓画伯来訪、良寛書を論じ以後交誼を続ける。長岡の羽賀虎三郎、順藏父子と交遊、研究の援助をうける。
- 一一 42 高野辰之博士来泊、「豆本」について論争。良寛書確認のため、揃って分水町解良家を訪ね、遺墨を見て納得される。博士は信州野沢温泉の別荘「對雲山莊」での静養を兼ねた研究を勧められるが固辞する。
- 一二 43 相馬御風氏より「以後は良寛書の箱書、鑑定をするよう」勧められ、愛蔵の端溪硯を贈与され激励をうける。
- 一三 44 歌人吉野秀雄氏と交友、以後兩三度来泊し肝胆相照らす。
- 一四 46 のち鎌倉の吉野登美子未亡人と激励し合う。
- 一五 55 北方文化博物館長伊藤文吉氏の知遇をうけ、後に博物館に永住して研究をするよう勧められるが辞退する。伊藤文吉氏より哲四郎が良寛書と確信した「百人一首」鈔本原本を贈られる。与板町有志と塩之入良寛歌碑を建立し、宿願を果たす。
- 一六 56 玉井潤次氏来訪、良寛を通じて交誼。玉井氏を通じて安倍能成氏を知る。秋、『新平家物語』執筆中の吉川英治氏が杉本健吉画伯同道で来越、島崎の木村家で終日良寛遺墨を鑑賞する。これに同席して行を共にする。吉川、杉本両氏は塩之入歌碑の文字、刻字を絶賛される。この年一月一日、突然こしの千涯画伯来訪。画伯は以後昭和二九年まで月の半分は滞在して良寛書を見、画業に専念する。
- 一七 59 健康をそこね病臥が続く。家計の故あって所蔵の良寛遺墨の大半を手離した。しかし、後年これらをすべて回収した。奈良の法輪寺貫主井上慶覺師来町、法隆寺と共に支援するので奈良への転任を、と勧められるが固辞する。
- 一八 63 東京の根津美術館の良寛展に協力依頼あって二十日間滞留する。次いで館長根津嘉一郎翁の招きで三女長を帯同し館内居室で四年四ヶ月滞留在し東京方面の良寛遺墨研究に専念する。良寛書の鑑定家として名を成す。在京中、書家西川寧氏より書の指導をうけ、また法輪寺貫主、安倍能成氏、林武画伯（良寛歌集）を編んだ国学者林蕨雄の孫）、明治神宮々司甘露寺受長氏等著名家との交流広まる。
- 一九 70 四月、家庭事情により帰郷する。離京に際し林武画伯は、鎌倉の別荘もしくは東京のマンションを提供するからなお停って研究継続を、と勧められたが辞退する。
- 二〇 71 72 気管支拡張症のため半年ずつ長岡中央綜合病院に入院加療、大光相互銀行の駒形十吉氏より物心両面の援助をうける。
- 二一 73 五月、BSN新潟放送・テレビの取材を受ける。後日、これにもとづき良寛書蹟研究、殊に良寛書『百人一首』の一部分の書字の比較、分析の様等がテレビ放映される。
- 二二 81 飯田利行博士との共著「傳良寛和韻大智偈頌」を国書刊行会より発行する。
- 二三 86 東京の求龍堂から良寛書「百人一首」の覆刻刊行を計画したが、諸事情によりこれを中止した。九月一五日西ドイツの良寛研究家ヤコブ・フィッシャー氏（八十一才）一行来訪、二十年ぶりの友情を温めた。
- 二四 89 長年連れ添い家業と研究に献身的な協力、支援を惜しまなかった妻節が永眠する。なお妻との間には三男五女を設け、次女貞は警察署勤めで家計を支え、三女長は哲四郎の身の回りの世話と共に研究の助手を果たし、次男哲次郎はしばしば写真撮影などの研究補助をつとめた。

- 六一 91 書家小泉秀観氏良寛書「九相図」についての日中共同研究資料をもって来訪する。
- 六三 93 「豆本」「九相図」をはじめ良寛書の真髄を広く理解してもらうため、長年蓄積した資料を整理し、これを駆使してなお研究に専念する。
- 平成元 94 良寛研究を通じての知友及び箱書鑑定を求める人が跡を絶たない。
- 平成三 96 良寛の書跡研究を通してその遺徳を顕彰し、町の文化向上に寄与したことにより与板町長より表彰される。
- 五 97 三月一五日、家族に見守られながら入院先の長岡中央総合病院で永眠。同月一八日、菩提寺浄土真宗本願寺派長明寺に於いて葬儀を執り行う。全国良寛会会長代理の同副会長齋藤信夫氏及び与板町元教育長石黒秀一氏が弔辞を献ず。故人の戒名は椿壽院釋哲理。
- 六 九月二六日～一〇月一〇日、親交の深かった石黒秀一氏夫妻が中心となり、与板町立与板歴史民俗史料館に於いて「森哲四郎展」を開催。

(森哲次郎 編訂)



書軸を掛けた森哲四郎翁宅の床の間(二階)



箱書き(蓋内)中の森哲四郎翁

焼佚餘録 (一) 図版、録文 一覧

図版 1 良寛ゆかりの遺品 (焼亡)

- 1 良寛乾漆像
 - a 厨子 国上山本覚院渋谷啓阿師開眼由来 記墨書
 - b 乾漆像全影
 - c 乾漆像頭部影

- 2 良寛遺愛大手毬
 - a 箱蓋墨書 (分水町中村家旧蔵)
 - b 箱内の大手毬
 - c 大手毬 刺繻の状
 - d 大手毬 上面

- 3 良寛書 荒木家看板「さけ」
 - a 表 (良寛の父以南の生家の店 舗所掲の遺品)
 - b 裏

図版 2 相馬御風関連品 (焼亡)

- 1 相馬御風所贈端溪硯
 - a 箱蓋裏墨記 (元相馬御風記念館館長 甲村忍村書)
 - b 端溪硯影

- 2 相馬御風書簡
 - (良寛筆艸書「蘭亭記」覆印本受贈の礼状)
 - a 書簡冒頭
 - b 書簡末尾・封筒表宛名書き

- 3 相馬御風自詠歌書軸
 - a 書軸全影
 - いやひ古能多可祢能雲能可ゝや可に
 - 古志能國は良よは安け無と須御風
 - b 部分影

- 4 相馬御風自詠歌書軸
 - a 書軸全影
 - 海か勢遠古くろよみ可毛和可い多久
 - 遠さな子もふ可起息遠曾春なる御風
 - b 部分影

図版 3 安田靱彦関連品 (焼亡)

- 1 安田靱彦書簡
 - a 書面 (良寛書「豆本寫真帖三」受贈の礼状)
 - b 封筒 宛名書きと署名 (訪問に対しての礼状)

- 2 安田靱彦書簡
 - (訪問に対しての礼状)
- 3 安田靱彦画
 - 良寛像部分、良寛歌録書 (大正八年初夏 北越旅 舎席上作)

- 4 安田靱彦画
 - 香爐画賛
- 5 書蹟研究中の森哲四郎 (昭和四三年五月)

図版 4 津田青楓関連品 (焼亡)

- 1 津田青楓書簡
 - (鮭一尾受贈の礼状)

- 2 津田青楓書簡
 - (受信の礼状、箱書き通知、「七折帖」拜見願い)
- 3 津田青楓画賛
 - (行燈圖)
 - 和閑志堂布非之理能文字遠
 - 起者面牟東餘留比留こころ
 - 閑与者春留幾美

- 4 津田青楓書画
 - a 書軸全影 (良寛詩と良寛小像) 印
 - b 部分影 中
 - c 部分影 下

- 5 津田青楓画紅葉地長歌書簡
 - 与意堂尔天
 - 於知也魔萬耳美遊幾
 - 布履都美宇都美
 - 非耳轉遠散之能弊天
 - 有萬散計遠久美閑
 - 者之川、曾能閑美能
 - 非知里能有多遠
 - 閑弊耳者里有知難
 - 閑面川、求無散計
 - 能宇萬起耳

十一月十六日

懶

森 さ満

図版 5 會津八一、吉野秀雄関連品 (焼亡)

1 會津八一添削指導遺品 a 君、微、宮 (朱書 會津八一加筆部分)

b 君、微、宮、(幡)

c 宮、幡、(携)

2 吉野秀雄自詠歌書 (昭和四十一年十月二十日書)

王礼毛末太 聖耳口遠 合世言ふ

死ぬ時節尔者 死ぬか与久候

吉野秀雄歌 眞

3 吉野秀雄自詠歌書

怖ち於知登 せ留 吾礼遠 我連

策励す 死は巖根耳 在里 骨他清之 秀雄枕頭詠 眞

4 吉野秀雄自詠歌書

山ひと能 背負ふ リユックは 者知幾連武 はかり耳 栗の粒つふか

見ゆ 秀雄 眞

図版 6 こしの千涯、三輪晁勢関連品 (焼亡)

1 こしの千涯画 「良寛遺愛大手毬」、ひとふでのや書「良寛さま能美宇當」

ま能美宇當

a 書画軸全影 閑數美堂川奈可起波留悲

耳こ 東毛羅と

安處 者流比者當能之久

鞆留加那 ひ東不轉能也書

b 書画全図

2 こしの千涯画

森哲四郎賛 良寛散末能毛の

都幾波幾与 之 和礼堂

3 こしの千涯画 森哲四郎賛

知 萬者無 奴者當萬乃 こ与悲能川 起 耳以祢良留 弊之也

者留能くの和閑(奈)都

武と天志報

能里乃左可能

こ奈堂耳

こ能悲久

良之川

良寛歌

4 三輪晁勢寫生画 良寛遺愛大手毬

a 全影 晁勢 眞

b 部分影

5 三輪晁勢水彩画 月 眞

6 三輪晁勢水彩画 蘇州城外 眞

図版 7 小谷津任牛、田中青坪、山本丘人、林武、安倍能成、西川寧、歐豪年関連品 (焼亡)

1 小谷津任牛 画 手毬 任牛 眞

2 田中青坪、山本丘人 書画 五合庵乃秋 青坪 眞

3 林武 書 眞善美 林武

4 安倍能成 書 泉涓く 而始流 録愛詩句 能成 眞

5 西川寧 書 顧影 獨盡 安寧書

于碑記 眞

昭和十三年 明治佳節

眞善美 林武

泉涓く 而始流

顧影 獨盡

安寧書

于碑記

6 歐 豪年 書
 a 軸装全影
 b 書蹟全影
 a 書
 張旭飛馳懷素狂前
 規千載足於莊寬禪
 艸法能邁古攻錯
 他山有見創
 森哲四郎先生(……)
 歐豪年 [印][印]

7 駒形十吉 書簡
 部分 (來訪及び墨書受領の礼状)
 b 森翁像 森哲四郎先生九十高齡
 (……) 歐豪年 [印][印]

図版 8 松岡 讓、高野辰之関連品 (焼亡)

1 松岡 讓 書軸
 a 軸装全影
 b 書蹟全影(部分接合)
 日壯三春、水下隨墅水
 空林望花一片閑落
 小眠中 鴉山人書 [印][印][印]

2 高野辰之 書軸
 a 軸装全影
 b 書蹟全影(部分接合)
 天皇皇后兩陛下能御前に進講仕か
 うまつり ける日与めり介流 辰之
 与起日けふ麦生乃雲雀日越あ見天
 聲を久毛る爾聞衣あけ天
 a 軸装全影
 b 書蹟全影(部分接合)
 忘杖懶歸五合菴焚香趺坐徹
 晝閣揮毫紙上龍蛇走莫
 咲古高算勘暗 良寛上人 斑山 [印][印]

3 高野辰之 書軸
 a 軸装全影
 b 書蹟全影(部分接合)
 忘杖懶歸五合菴焚香趺坐徹
 晝閣揮毫紙上龍蛇走莫
 咲古高算勘暗 良寛上人 斑山 [印][印]

図版 9 A 鈴木文臺、鈴木虎雄関連品 (焼亡)

1 鈴木文臺 書軸
 a 軸装全影
 b 書蹟全影
 嬋娟脩竹逞齒姿煙月雨風皆共宜終
 歲相看無偽慮應心信筆是吾師
 詠竹二首之一 文臺外史 [印][印]

2 鈴木虎雄 書額
 a 跋文全影(鈴木宗家 瑞香堂所藏良寛
 上人横卷影印本跋)
 b 跋文冒頭部分
 c 跋文末尾 款署部分

3 森哲四郎 鉛筆臨摹「青山帖」(鈴木宗家 瑞香堂所藏良寛上人横卷)
 a 部分影
 b 部分影

図版 9 B 鈴木文臺、鈴木虎雄関連品 (佚亡、焼亡)

4 鈴木文臺 良寛上人横卷 跋文
 a 跋文全影
 b 跋文録文、私訓

5 鈴木虎雄 書額
 a 跋文全影(鈴木宗家 瑞香堂所藏良寛
 上人横卷影印本跋)
 b 跋文録文、私訓

図版 10 A 森哲四郎の良寛書蹟研究に関わる交流人士小照 (焼亡)

*表記は左から

1 安田鞞彦、森哲四郎、甘露寺受長
 (於 神奈川県大磯町 安田鞞彦画伯宅)

2 森哲四郎、ヤコブ・フィッシャー、原田勘平、倉品義治
 (於 新潟県与板町 与板町小学校礼法室)

3 ヤコブ・フィッシャー、森哲四郎
 (昭和五十六年九月十五日 於 新潟県与板町 森哲四郎宅)

4 森哲四郎、吉野秀雄、伊藤喜一郎、浜田整曳、白井広七
 (於 新潟県与板町 香積山徳昌寺)

- 5 根津嘉一郎、森哲四郎（於 東京都港区南青山 根津美術館居室）
 6 奥田直栄、塚田峯陽、森哲四郎、森長（於 東京都港区南青山 根津美術館門前）

- 7 森哲四郎、津田青楓（於 東京都杉並区下高井戸 津田青楓画伯宅）
 8 森哲四郎、奥村土牛（於 東京都杉並区永福町 奥村土牛画伯宅玄關）

図版10 B 森哲四郎の良寛書蹟研究に關わる交流人士小照（焼亡）

* 表記は左から

- 9 大矢敏次郎、林武、森哲四郎、吉野秀雄

- 10 大矢敏次郎、森哲四郎、西川寧（於 神奈川県鎌倉市小町 吉野秀雄氏宅）

- 11 安倍能成、森哲四郎（於 東京都港区南青山 根津美術館）

- 12 磯野武、解良順治、森哲四郎（於 新潟県与板町 森哲四郎宅）

- 13 谷川敏朗、本間敏雄、森哲四郎（於 新潟県与板町 森哲四郎宅）

- 14 飯田利行、森哲四郎（於 新潟県与板町 森哲四郎宅）

- 15 歐豪年、森哲四郎（於 新潟県与板町 森哲四郎宅）

- 16 森哲四郎と良寛上人詠歌碑（於 新潟県北魚沼郡堀之内梁場）

- 志婦柿尔二奈計礼ハ
 美報と氣乃非
 佛能み聲難之
 登天毛所連
 良寛上人詠歌 双葉拜書

図版11 森哲四郎の摹書と碑文原稿及び所蔵拓影（焼亡）

- 1 題峨眉山下橋杭、夢左一覺後彷彿

- 2 与板八幡宮詩碑 原稿

- 3 塩之峠歌碑 原稿

- 4 「峨眉山下齋」杭刻字拓影 a 全影
 b 部分影

- 5 森哲四郎展 展示拓影 看板字「さけ」他
 6 森哲四郎展 展示拓影 岡山県玉島 圓通寺 詩碑 他

- 7 「今人諺語」板刻拓影 部分影

図版12 森哲四郎の習字、臨書（焼亡）

- 1 新潟商業学校在学中の習字（明治四十四年十月四日）

- 2 「小倉百人一首」（卷菱胡書の臨書） a 表紙 b 扉

- 3 「草書之疑」「草書」（大正三年六月 艸書文例の習字） c 開頭丁 d 末尾

- 4 「艸書帖」（大正五年十月 艸書の習字） a 表紙 b 「意」部以下 c 末尾

図版13 森哲四郎の摹写、臨書、書作品（焼亡）

- 1 良寛書「鬮體画替詩」臨書（大正五年新町の長谷川石松が養父に持参、披見した良寛書を一夜借用し臨書したもの）

- a 書軸全影
 b 書蹟全影（部分接合）
 静夜飄く ……

- 2 良寛書「代求古悲 長歌」臨書（ひとふでのや主人）

- 3 良寛書「以也悲古能 長歌」臨書

- 4 「幾み可餘波」謹書（一筆舎 皇紀二千六百年 明治節）

- 5 「也未加玉能 ……」詠歌書（双葉書）

図版14 森哲四郎の模写、書刻作品（焼亡）

- 1 良寛詠書 臨書 「安之悲幾能也萬 能之氣美也

- 己非（奴）良之 和礼毛 無可之能 於裳

ほ由良久耳」

2 良寛左萬の御和歌 臨書 「安幾能与者難 加之東 以弊登

散春當希乃 幾み東可多礼

者美知可久毛 安留閑

双葉拜書

3 良寛上人詠歌 臨書

「萬數羅遠乃 布美氣武与

く能布留美 知波安礼耳計

良之裳遊 久悲東奈之耳

双葉書

4 良寛詠懷歌 臨書

「与能奈可耳萬 之羅奴登尔者

安良年東毛悲 止理安所比處

和連波末左礼流

飛東不天能也書

5 良寛和尚御作長歌、反歌 臨書

a 冒頭部、中間部

「志保能利能左閑者留登起

く天」……

b 末尾部

「悲東不天のや書」

6 良寛書 板刻 「迷悟庵 良寛書」

図版15 森哲四郎の臨書、書作品（焼亡）

1 良寛詠長歌 臨書 「遊久美都波 勢計波東萬留遠 ……」

2 良寛詠歌 臨書 短冊「志久留く遠理波裳美地者遠 悲起天當

遠利轉雲知可散之 安萬多川起

日遠春己之川流閑毛」

3 良寛和尚之句 臨書

a 書軸全影

「 双葉拜書 ㊦

秋悲与理 勢牟羽春く免乃

羽遠止可那

良寛さまの句」

b 部分影

4 良寛和尚之句 臨書 「以久へ安留保當以能

者那遠數へみ与」

5 良寛和尚「青山帖」 双鈎 冒頭部

図版16 森哲四郎の書作品（焼亡）

1 「天上」 捲り

2 「大風 双葉」 二曲一隻屏風

3 「自然 哲書」 捲り

4-a 「百花薫 双葉書」「處和 双葉書」「竹風」「無量壽 双葉拜書」

（二曲一隻貼交ぜ屏風右屏）

4-b 「我一以貫之 双葉拜書」「交友莫争 双葉拜書」「春雨や友遠尊武

於毛比あり 双葉書」「天上／大風」「聽松風 双葉拜書」（二曲一

隻貼交ぜ屏風 左屏）

5 「辭老 双葉拜書」

6 「龜 双葉書」

7 「騰く任天巖上松 双葉」

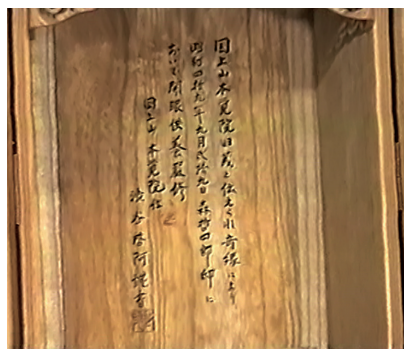
8 「無事 双葉書」



1-c



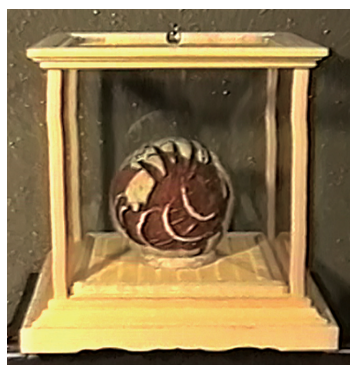
1-b



1-a



2-c



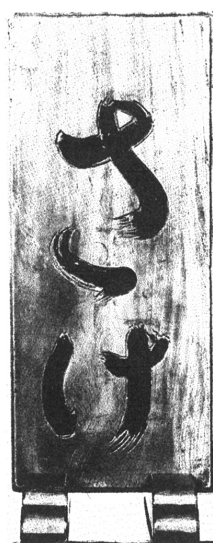
2-b



2-a



2-d

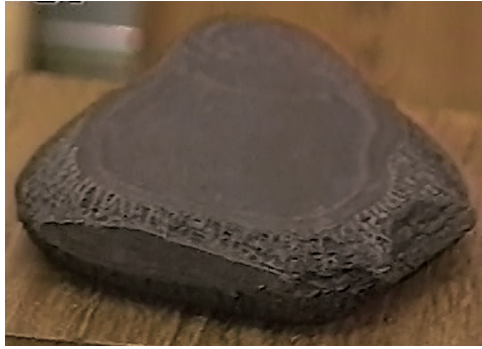


3-b

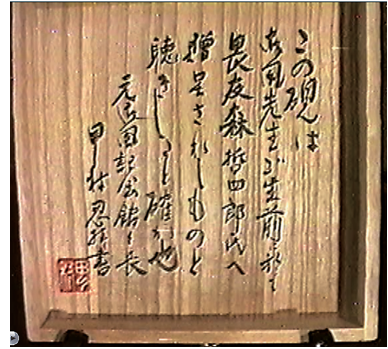


3-a

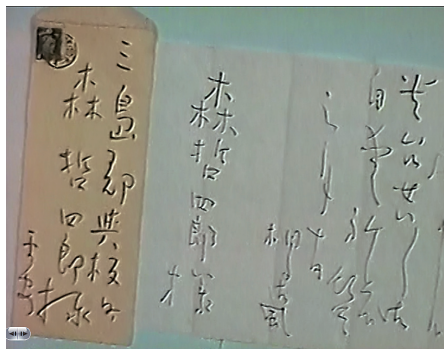
图版 1



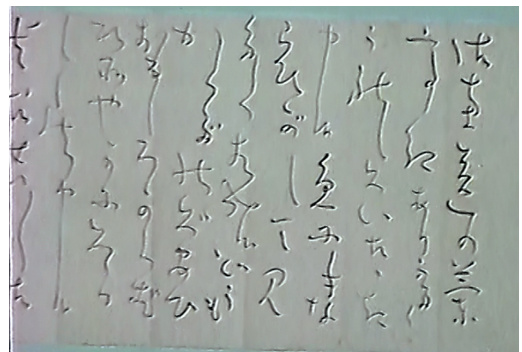
1-b



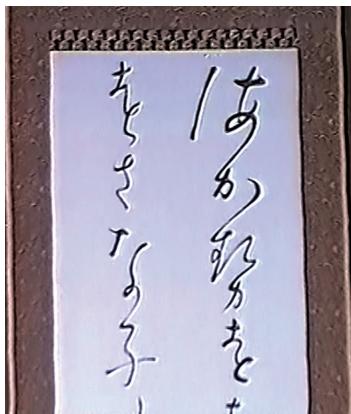
1-a



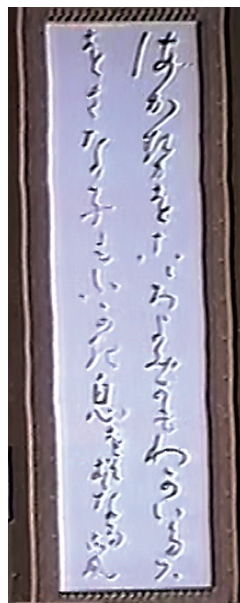
2-b



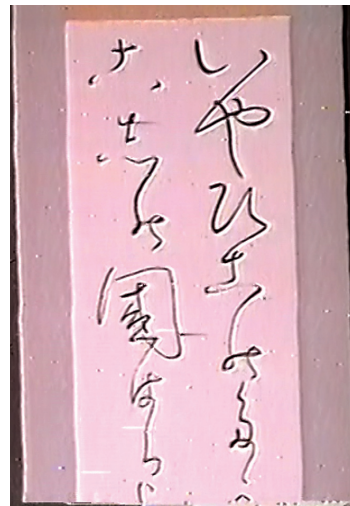
2-a



4-b



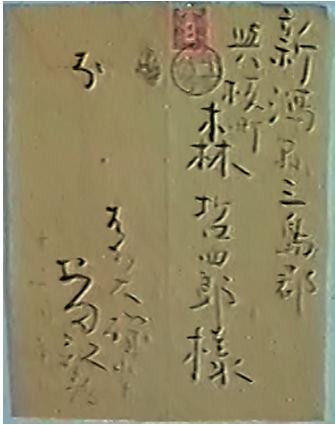
4-a



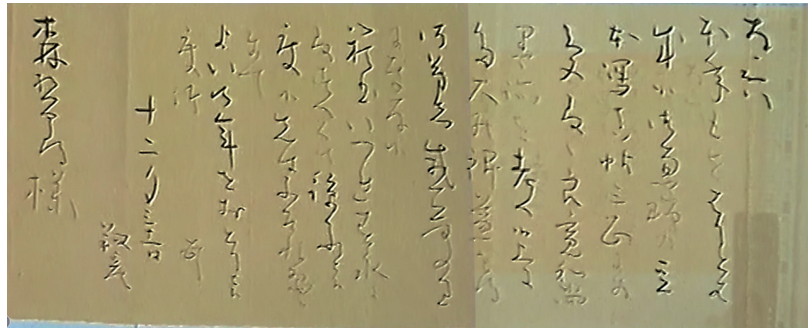
3-b



3-a



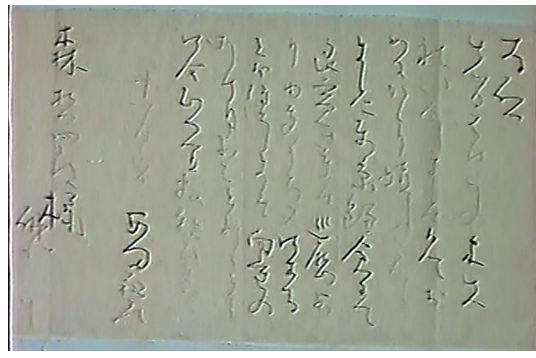
1-b



1-a



3



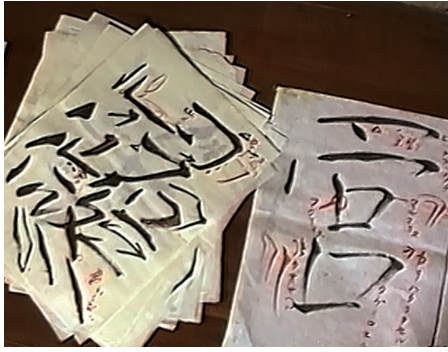
2



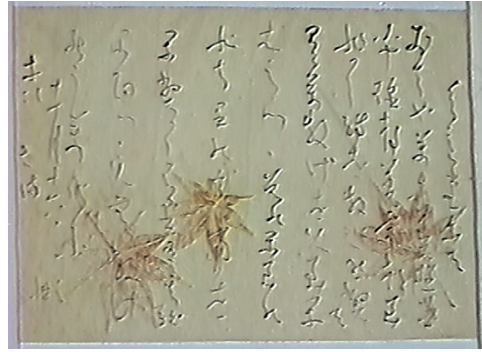
5



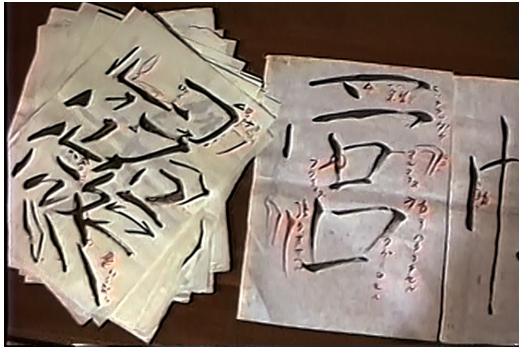
4



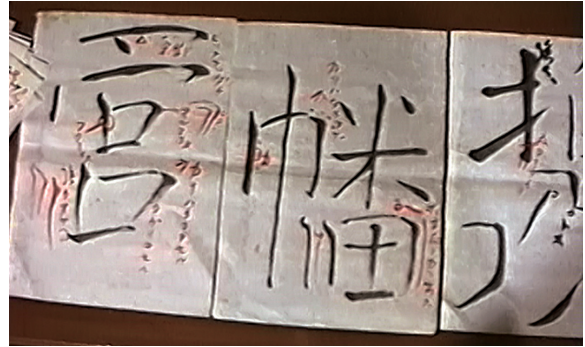
1-a



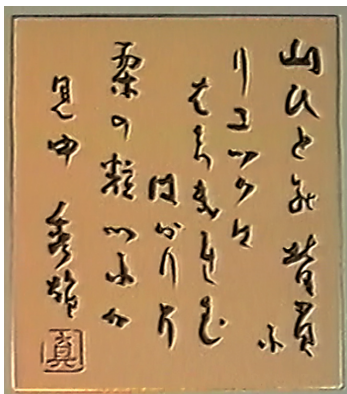
図版 4 5



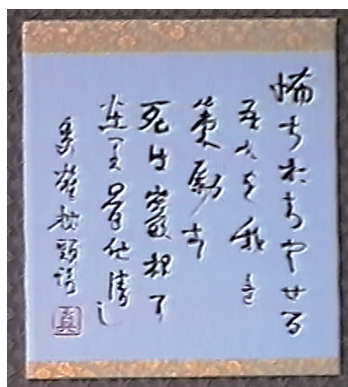
1-b



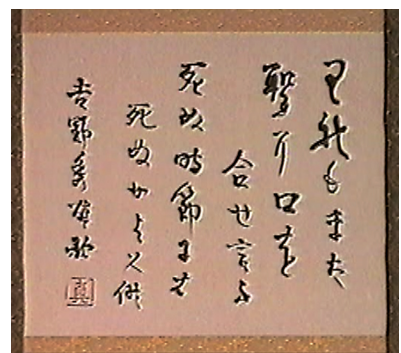
1-c



4

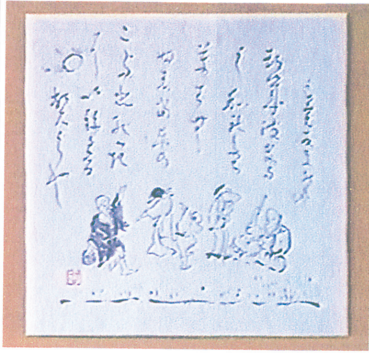


3

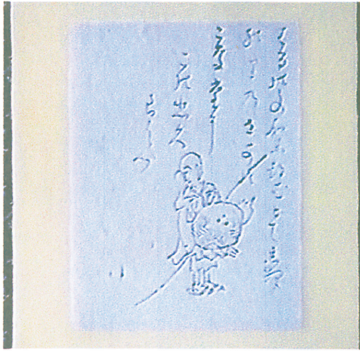


2

図版 5



2



3

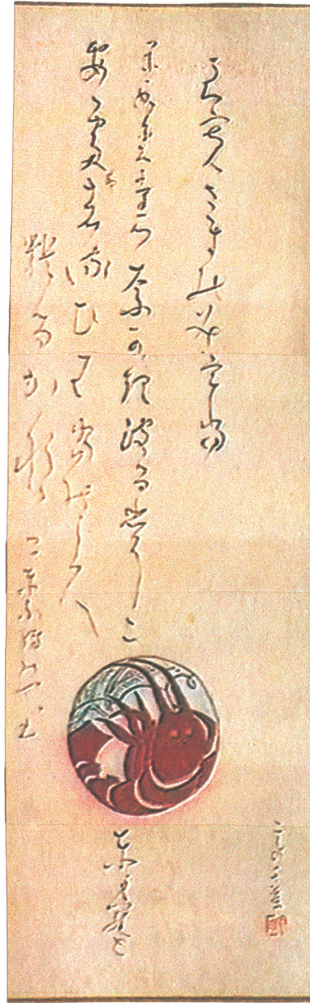


5

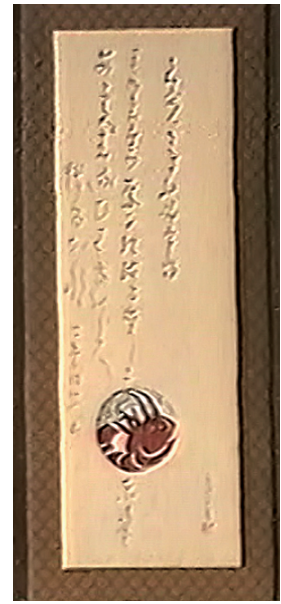


図版 6

6



1-b



1-a



4-b



4-a



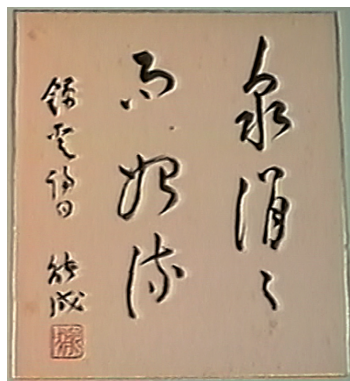
3



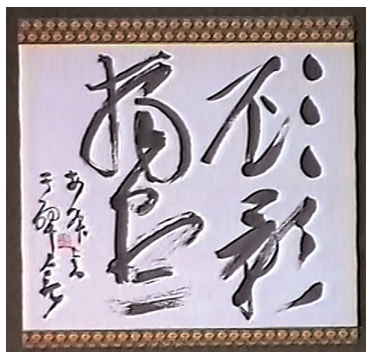
2



1



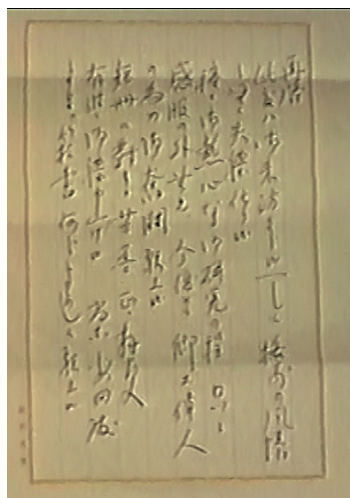
4



5-b



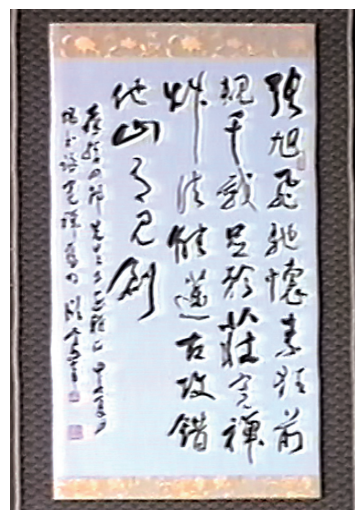
5-a



7

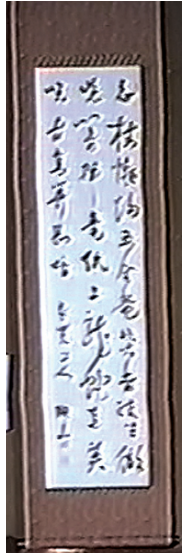


6-b

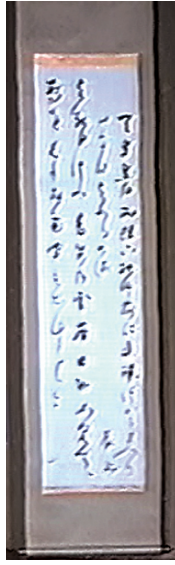


6-a

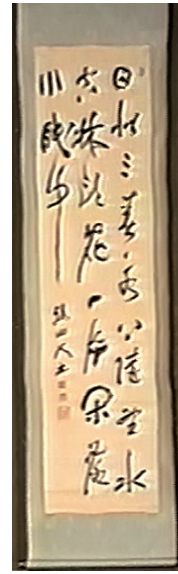
圖版 7



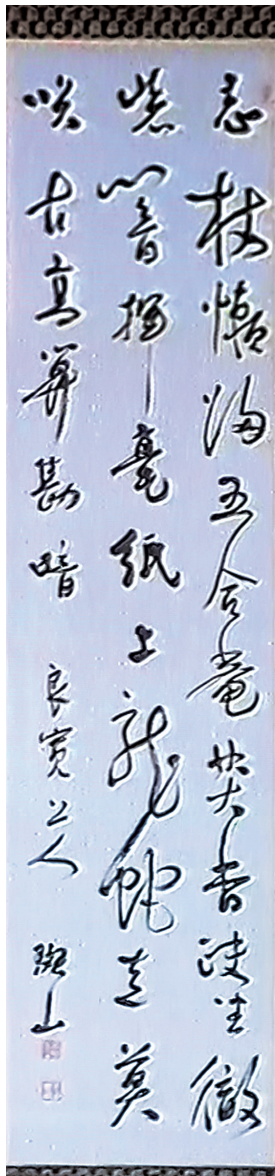
3-a



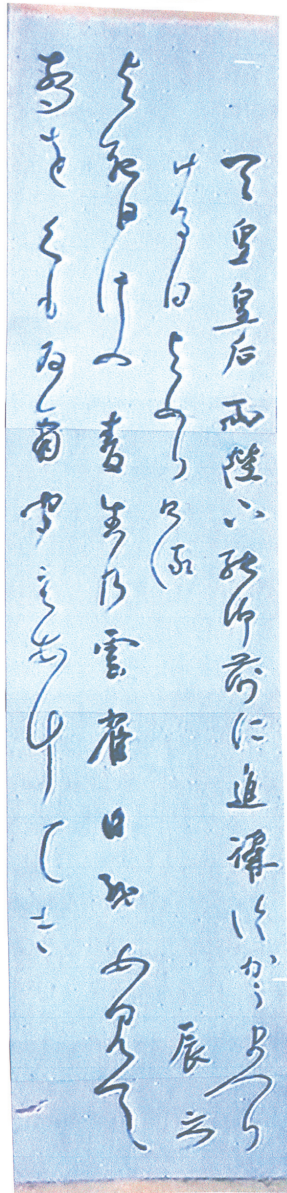
2-a



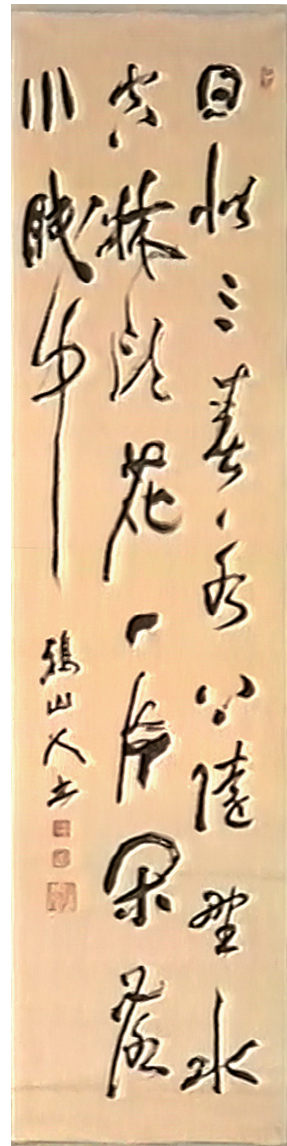
1-a



3-b

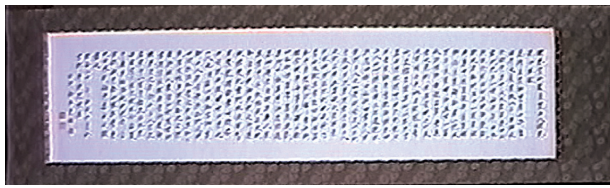


2-b

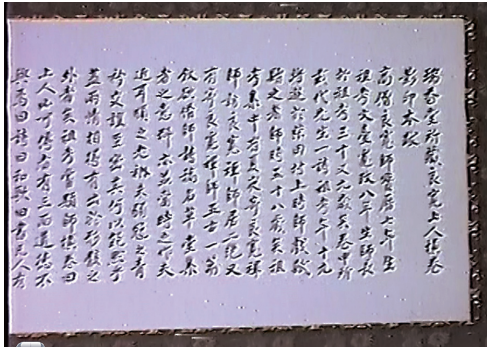


1-b

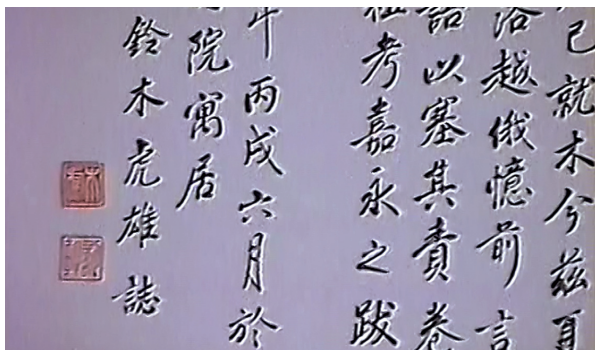
图版 8



2-a



2-b



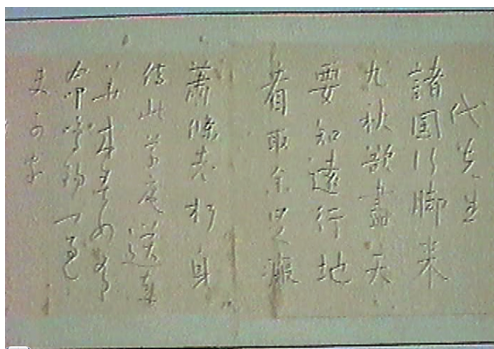
2-c



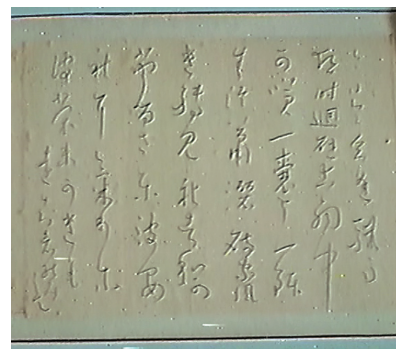
1-b



1-a



3-b



3-a

右良寛上人所書弘化丁未之歲亡姪君則... 嘉永五年壬子仲夏二十九 文臺

4-a

録文

私訓

青山帖跋 右良寛上人所書弘化丁未之歲亡姪君則... 嘉永五年壬子仲夏二十九 文臺

青山帖跋 右良寛上人の書く所なり。弘化丁未の歳、亡姪君則... 嘉永五年壬子仲夏二十九 文臺

4-b

瑞香堂所藏良寛上人書巻 影印本跋 高僧良寛師實曆七年生... 昭和三十二年丙戌六月於京都等持院寓居

5-a

録文

私訓

瑞香堂所藏良寛上人書巻 影印本跋 高僧良寛師實曆七年生... 昭和三十二年丙戌六月於京都等持院寓居

瑞香堂所藏良寛上人書巻 影印本跋 高僧良寛師實曆七年生... 昭和三十二年丙戌六月於京都等持院寓居

5-b



2



1



4



3



6



5



8



7

図版 10A



10



9



12



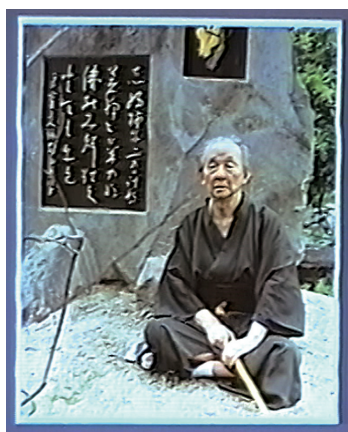
11



14



13

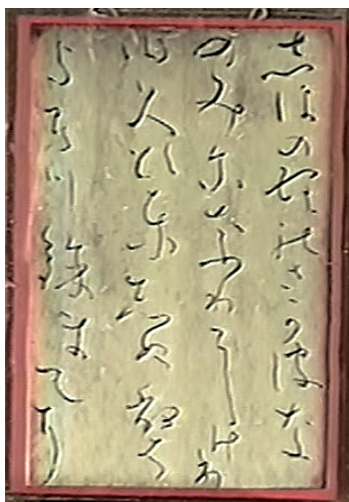


16

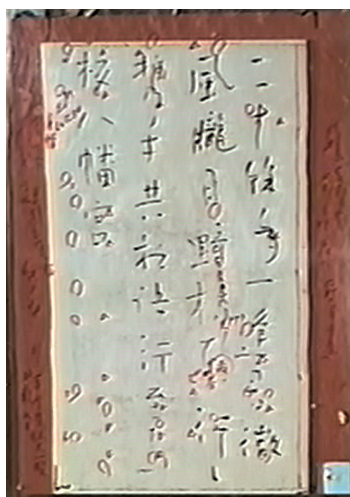


15

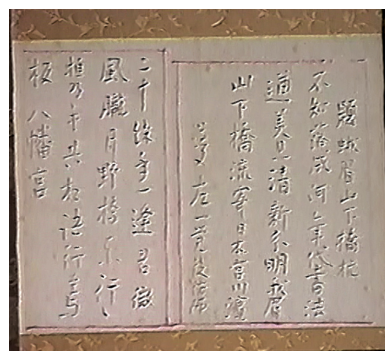
図版 10B



3



2



1



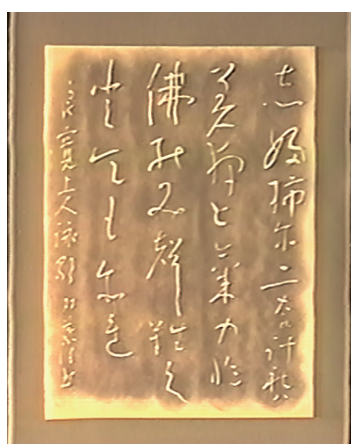
6



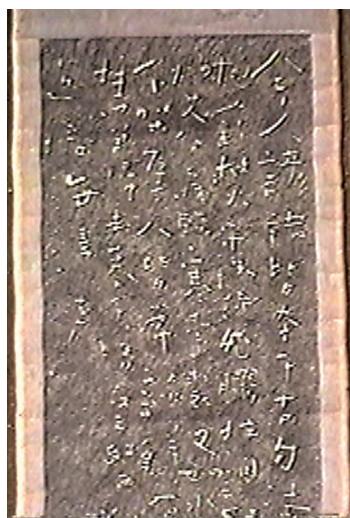
5



4-a



8

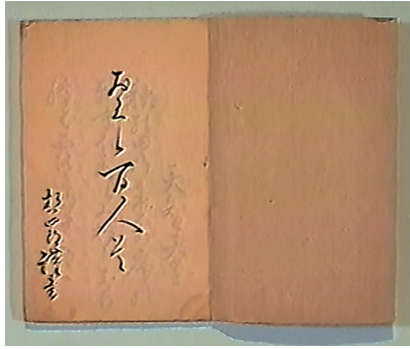


7

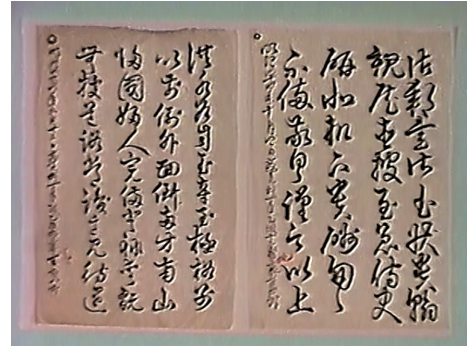


4-b

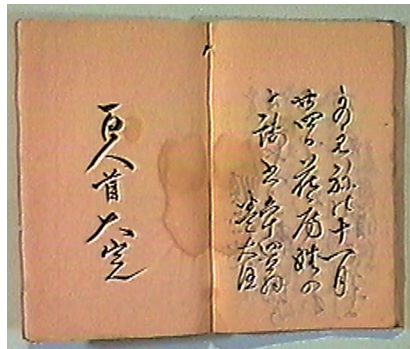
図版 11



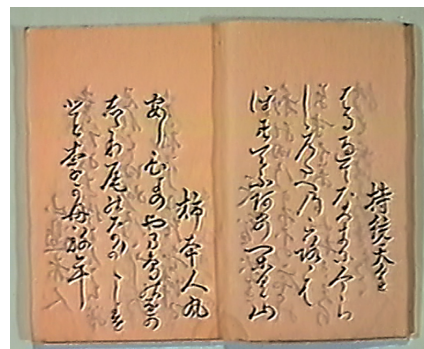
2-b



1



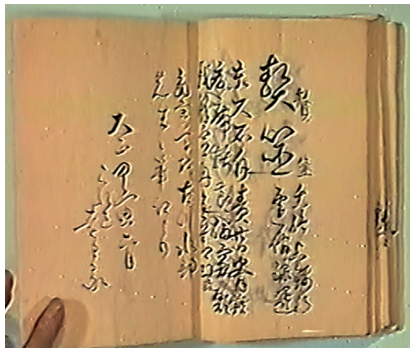
2-d



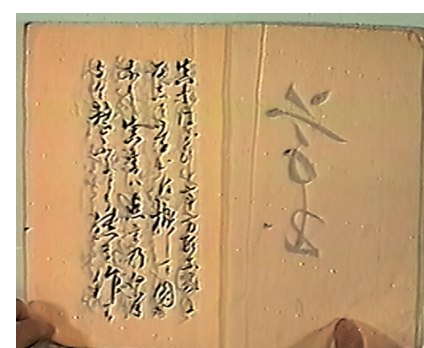
2-c



2-a



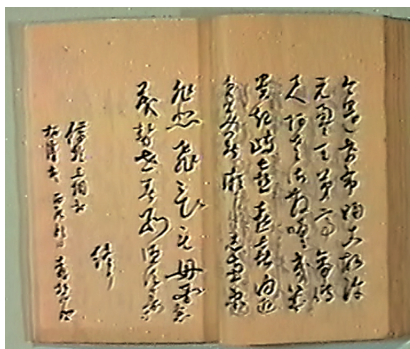
3-c



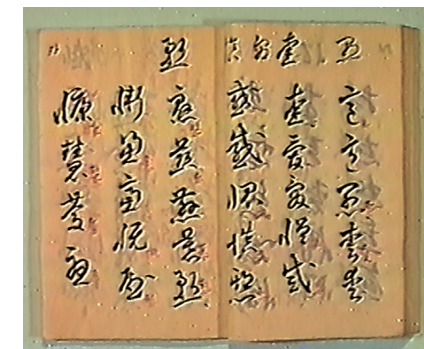
3-b



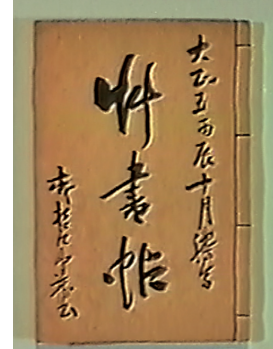
3-a



4-c

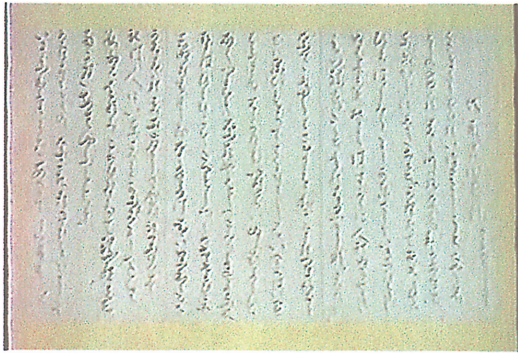


4-b

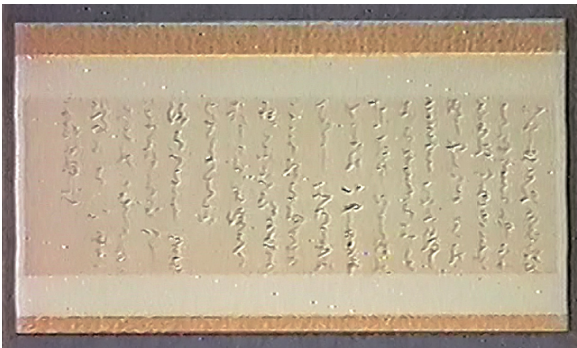


4-a

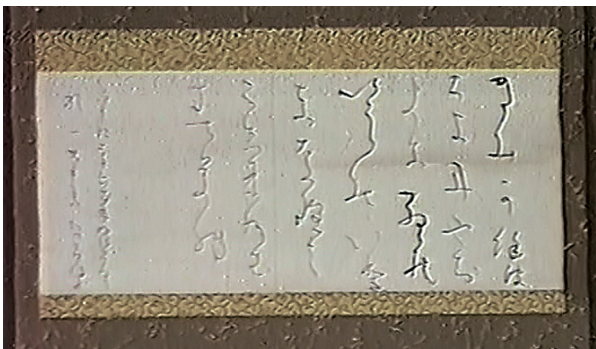
図版 12



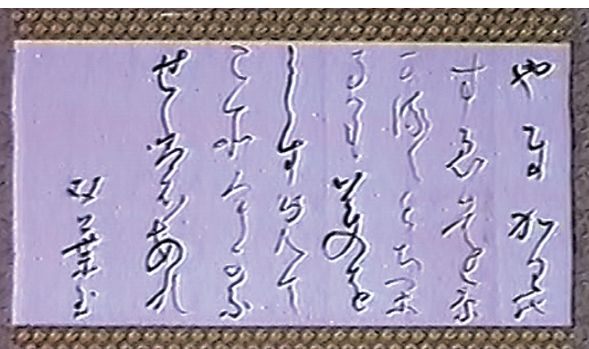
2



3

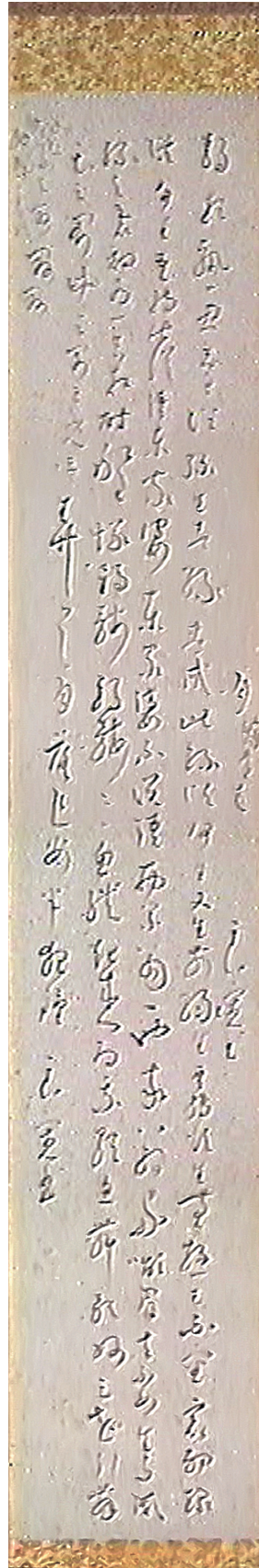


4

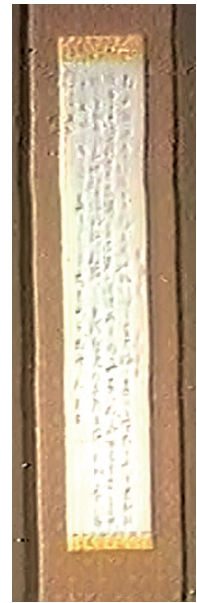


5

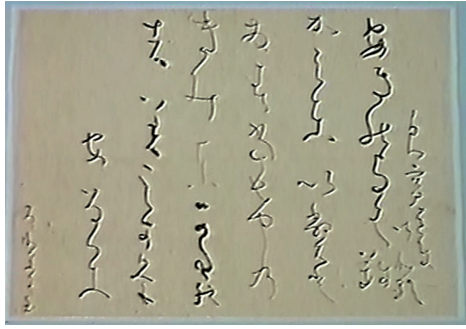
図版 13



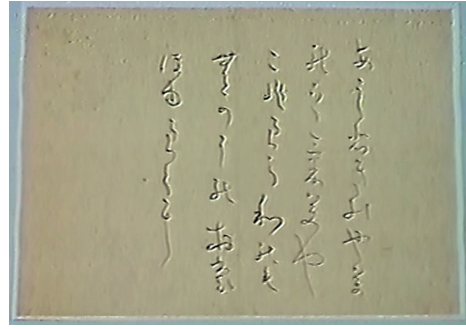
1-b



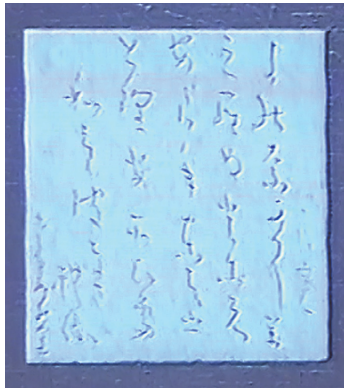
1-a



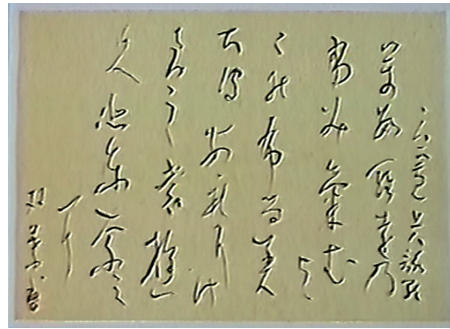
2



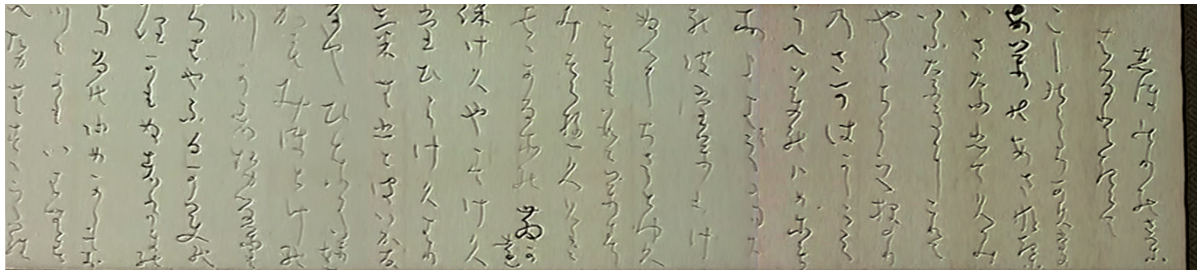
1



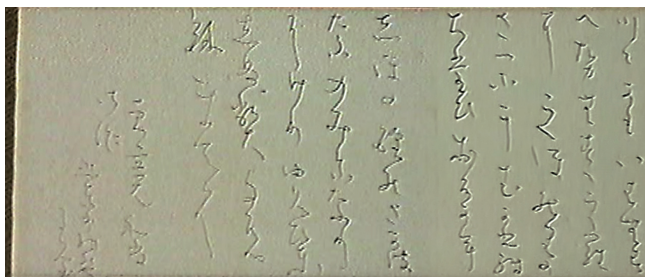
4



3



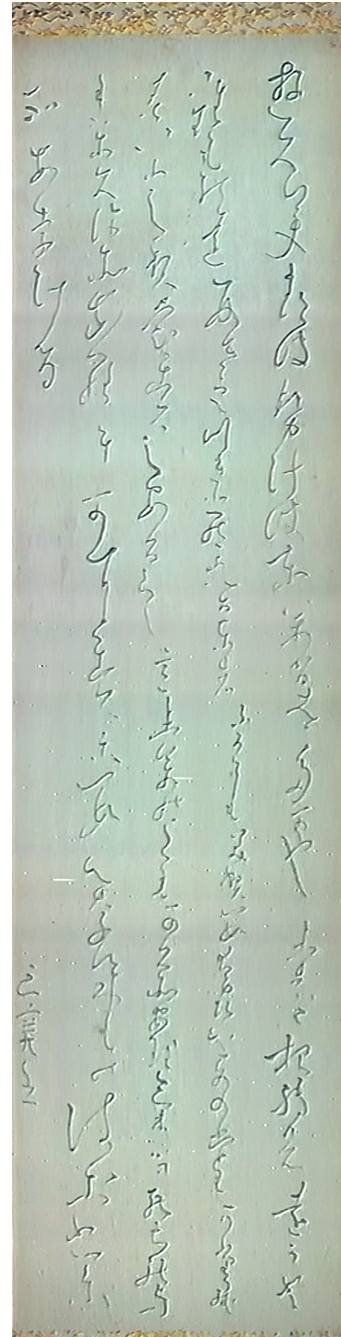
5-a



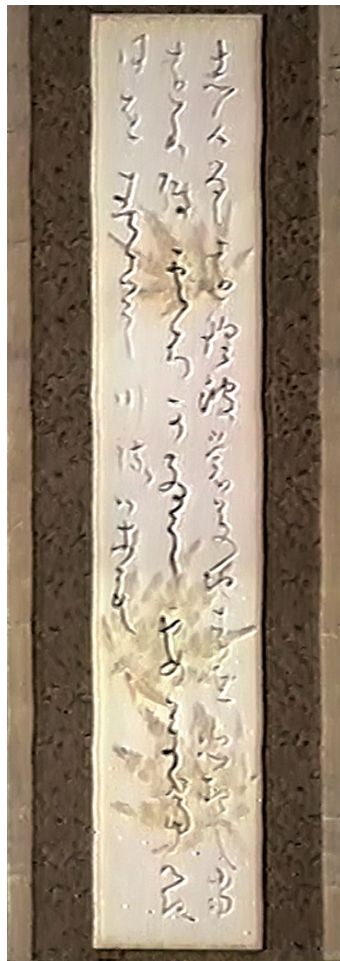
5-b



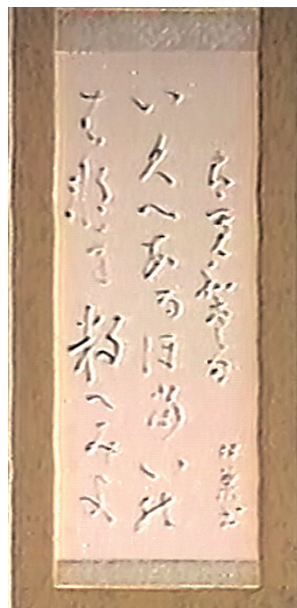
6



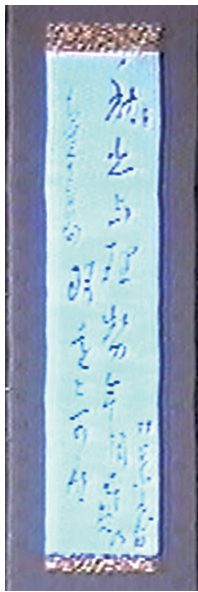
1



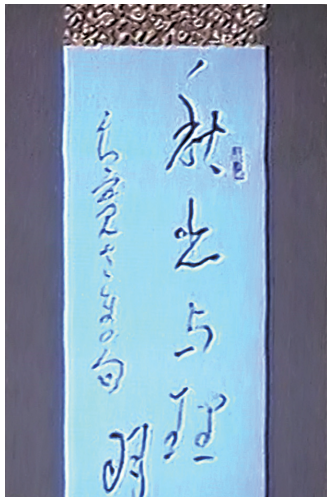
2



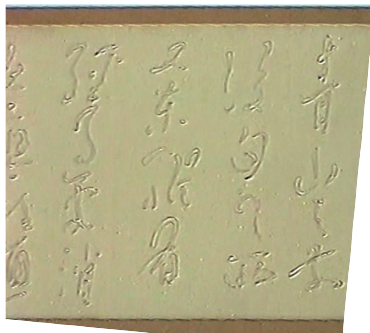
4



3-a



3-b



5



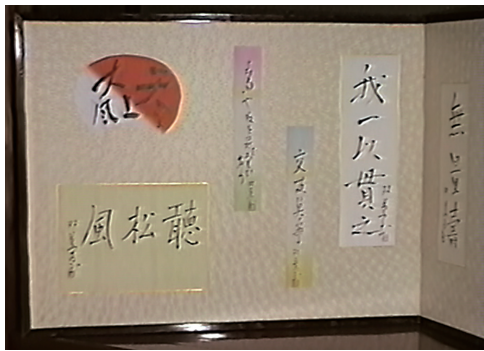
3



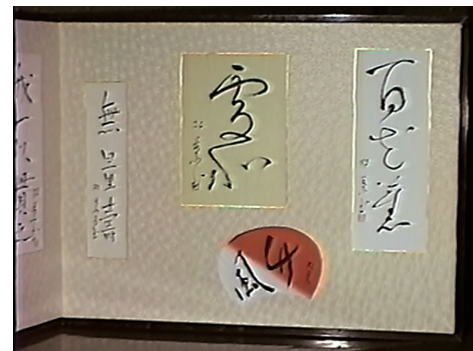
2



1



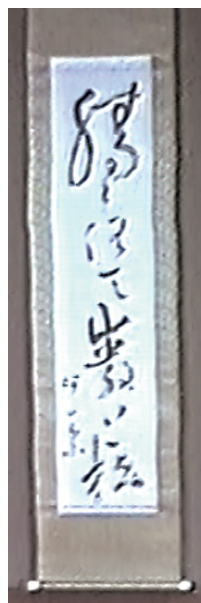
4-b



4-a



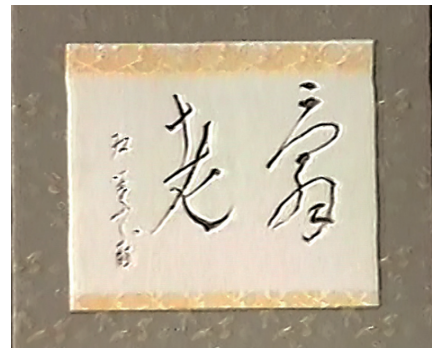
8



7



6



5

(もり てつじろう
 (たくま のぶゆき
 郷土史研究家)
 日本語日本文学科)

図版 16